南海

茶之湯評林大成

六

436

茶湯評林巻之六目録

古今名物茶入の来由
唐物肩衝茶入成并図
飯銅茶入并成目利并習
油桶茶入の成目利并習
水滴茶入并成目利并習
瓢箪茶入并成目利并習
弦付茶入并成目利并習
鶴頸茶入并成目利并習
文琳茶入并成目利乃習

茄子茶入此成目利のならひ
尻膨茶入此成目利此習
呂丁茶入此成目利此習
丸壷茶入此成目利此習
鮟鱇茶入此成目利此ならひ
大海茶入の成目利此ならひ
内海茶入此成目利此ならひ
常陸帯茶入の成目利此習
肩衝茶入此成目利此習
面取茶入此成目利此習

車柚茶入此成目利此習
橘之茶入此成目利此習
餌畚茶入此成目利の習
碼茶茶入此成目利の習
胴締之茶入此成目利此習
胴塚手茶入此成目利此習
耳付茶入此成目利乃習
樺茶入の成目利乃習
達磨茶入の成目利此習
笹耳茶入法目利此ならひ

手繡茶入之成目利之事
文茄茶入之相目利之習
西施茶入之成目利之ならひ
棒之先茶入之成目利之習
芋子茶入之相目利之習
[illegible]手茶入相目利之習
追加茶入飾習三拾九ヶ条
糸切之事并五つ之習

茶湯評林巻之六

古今名物茶入之来由

一凡本朝焼物之由来ハそれよりも行基菩薩和泉国陶器村
に窯を初めてより焼ものを焼或ハ花生釣瓶桶
を焼始めしかども茶入と云物ハ未だ無し栂尾之明恵上人初而茶
をうゑ給ひしより後又白磨土くハ宋朝の仁宗皇帝に
初而ひろまりしと也又天目と云物もはじまると云世人之
を聞て其時に加藤四郎左衛門と云者初て茶入を焼出す是
を藤四郎焼と云ハ上下を略して左衛門と云也焼物ハ瓶にて
あらく口を下にして焼し由へに口を上にあげて茶入を入る

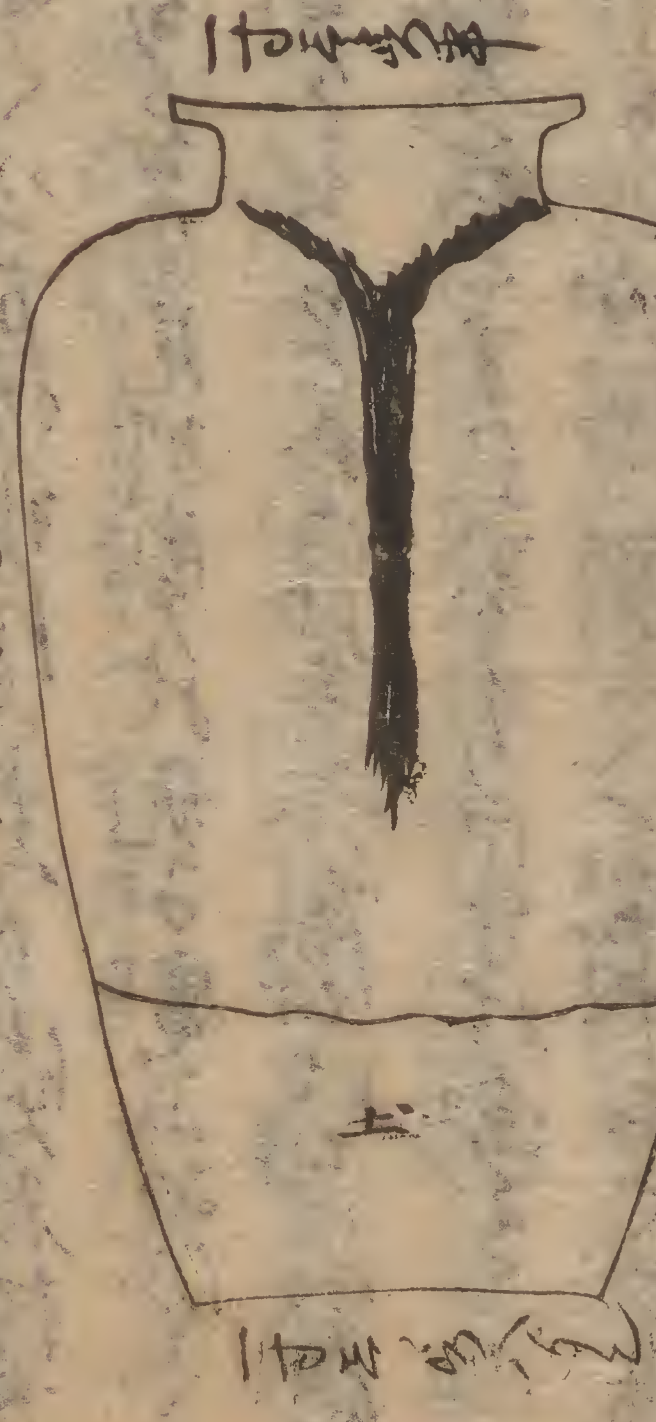
をおしくは厚手てありつくるなり是を口兀手と云も有二
永平寺道元和尚渡唐の節藤四郎同船にて入唐し
陶土の焼様の次第を相伝し彼土にて茶入を焼く入子の鞘を
持来日へ焼物の底を下に有し焼たる故に薬もよく
解土も能和して脂となりて出来しとや藤四郎は
後堀河院貞応年中の人にて元徳まで凡百年に及べり
其時の焼物什物としてあるまで残る所の伝記にある由
一或説に藤四郎入唐の節陶土を日本に持
来り茶入を六拾六焼て其六拾余州にひろめ
しといへり茶入は右の六拾六の内なりと云

名長ト此は唯物なく公方様鉢たゝきより御所へ名物
御下向之唐物にもあらずまた尾州瀬戸の瓶子竈にあらずしてまた
焼物とは似たる古瀬戸と云右あるは茶入にては唐土の土にて唐物
と云大なる習あり其後も口伝の余あり
一玉堂和尚渡唐しかの地の茶入を懐中して世に伝
へられし也玉堂の肩衝は是之
一唐物は土もこまやかにて薬もあめ薬多く脂と云事ある
物之何れも黒薬斑なく有共やかなり薬までなき八希
にて [illegible] 浅黄は何も正つきなり
一肩衝　文琳　茄子　瓢簞　鶴首　芦蹄　大海　丸壺

弦付(ツルツキ)飯銅(ハンドウ)角木(ツノギ)車軸(シヤジク)湯桶(ユトウ)捨帯(ヒ)陸常(タチスビ)八(ハ)えば(エバ)
しす類たるべし

飯銅(ハントウ)や湯桶(ユトウ)水滴(スヒテキ)瓢簞(ヒヤウタン)なと
はまれつき弦(ツル)ならびに金(キン)座(ザ)なくてよし

唐物肩衝(カラモノカタツキ)



たけ三寸六歩

底に糸筋あるもあり

飯銅(ハンドウ)茶入

一 飯銅(ハンドウ)ハ唐金(カラカネ)水器(キ)之上にて茶入ハ食器(シヨクキ)に用ゐ和語(ワゴ)にて
ハンテウ水(ズ)鉢(ハチ)火(ヒ)鉢(ハチ)砂物(スナモノ)鉢(バチ)よ
よハるるよ 似(ヨツ)て飯銅(ハンドウ)と云

一 古浅黄(アサギ)か茶入也 此茶入薄墨(ウスズミ)云
色之茶入也上薬か黒し 釉(ナダレ)比
又上薬(ウハクスリ)ハ極(キメ)く黒し 薄墨
色まじるもんなる物也之

胴の中段

長 一寸八歩
廻 八寸一分
口 二寸九歩
口ノ外二筋二ツ有
座 一寸七歩

一 凡名物を取扱ふ事 惣(ホツ)して常の道具よりも袋(フクロ)なとも又割(ワリ)
蓋ても見べし又古今つかひなれてもよる

油桶茶入 又油擔と云

一此名ハ手桶よりたへたる也油桶とも油を入物と云

節なし

一色浅黄色之又白き

土ハ下薬滲り

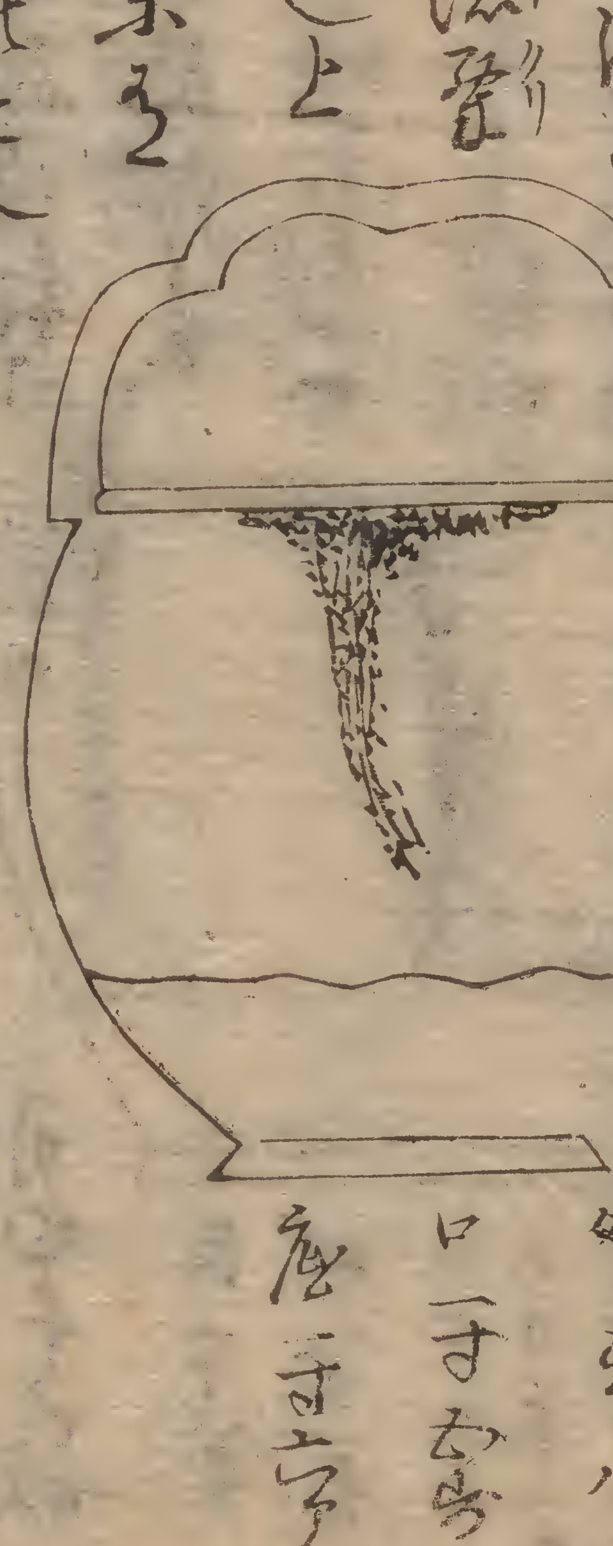
色艶よき物也上

薬ハ鈍錫薬也

薬留り胴あたりにあり也之

一蓋割ある物ある茶杓にて摘上にら内にけがるゝ

蓋は蓋比好中にも白銀にてらんかん之



長 二寸七分半

廻 七寸八分

口 一寸六分半

底 一寸二分

水滴茶入

一此茶入異国ゟ渡く云水入なるを故に水入と云ふと

申なり慈照院殿義政公

御物にて茶を入させ給ふ

以来茶入に用ゆと之

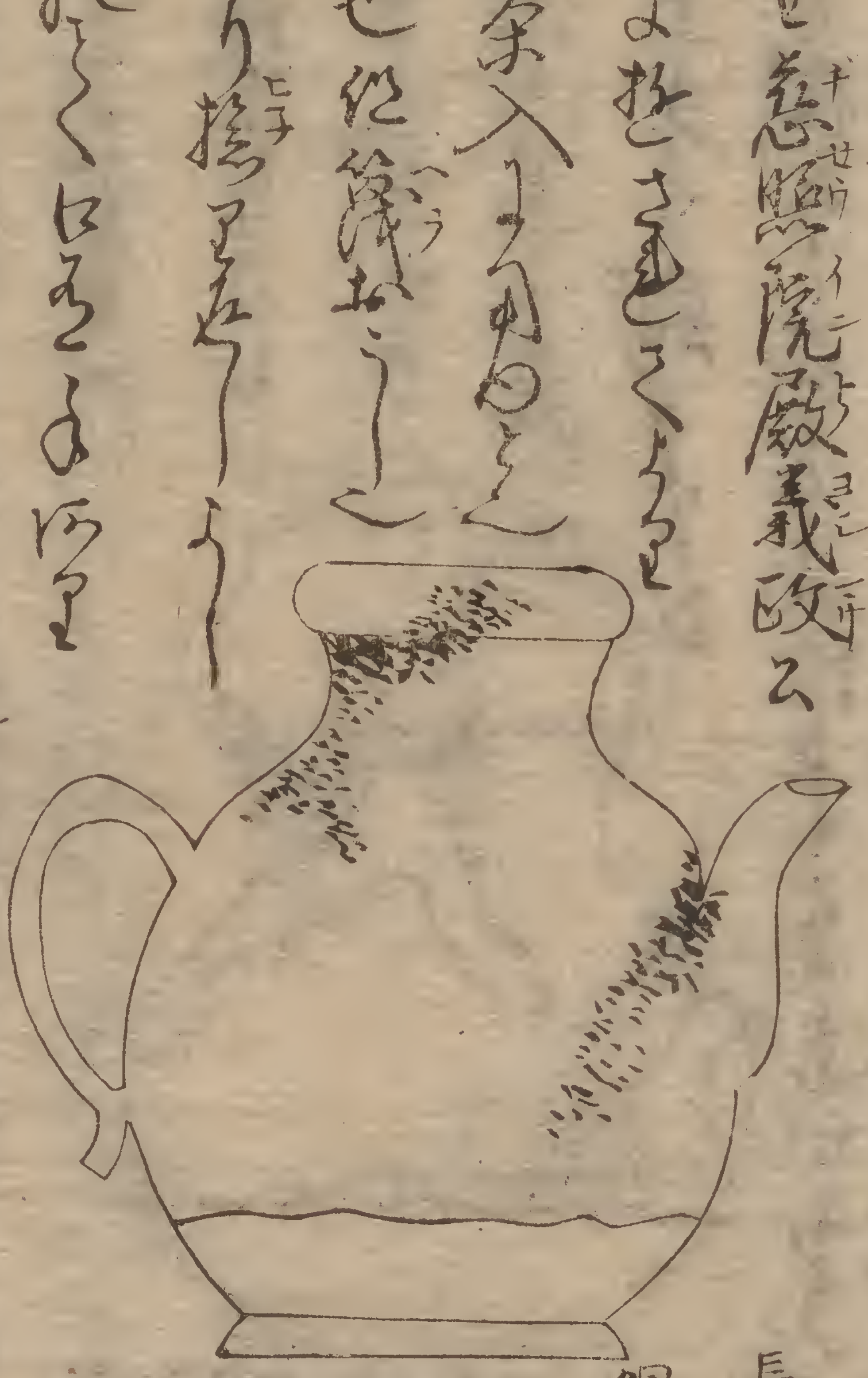
一土赤色也絵薬ハあらし之

一口まつり捻ありよし

付高おとく口ある所にて

一此茶入ハ黄薬かゝりたる之澁紙にて茶生に

口縁口小さく茶付ても黄銅羅紗彫砂茶と云



長 二寸四分半

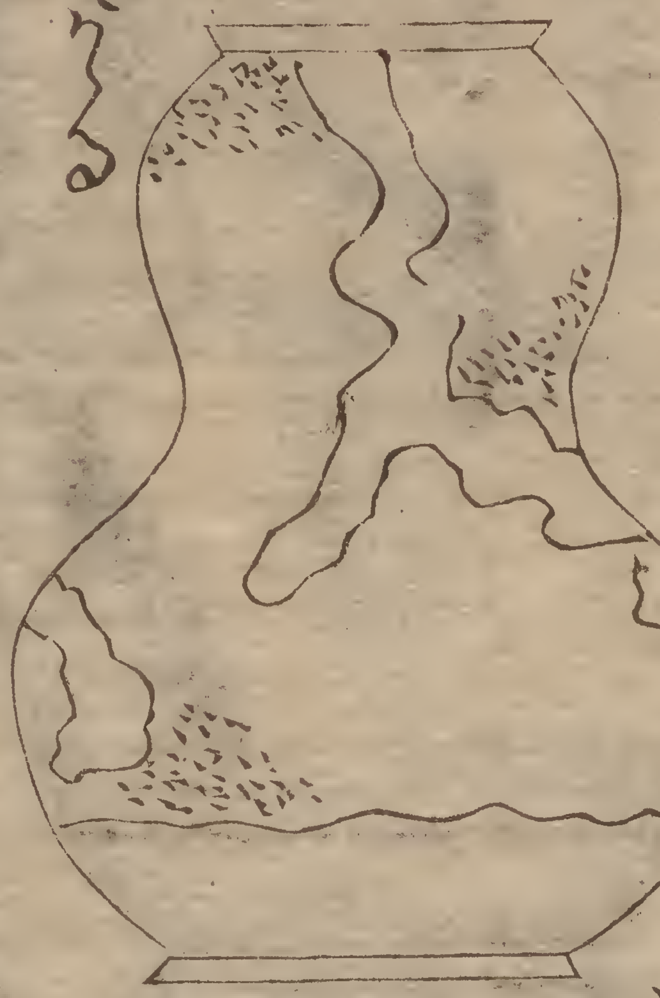
廻 七寸二分

口指渡 一寸六分

底 一寸三分

瓢箪茶入

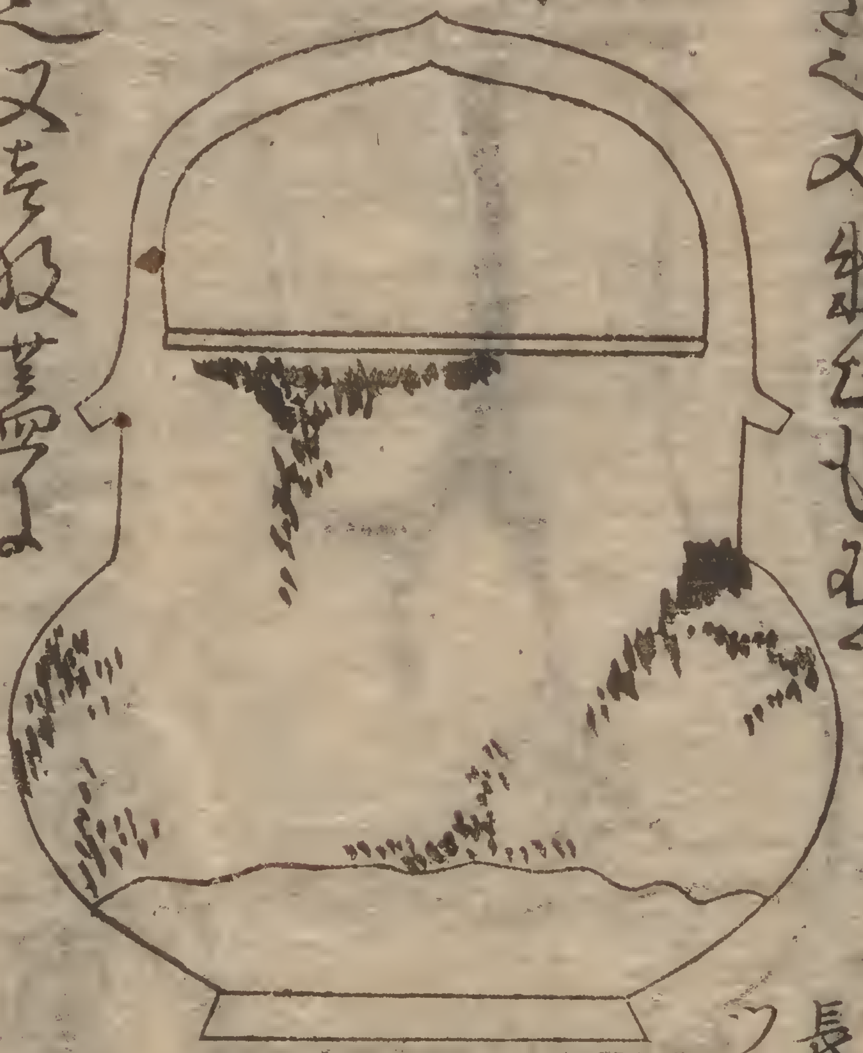
一 形瓢箪に似たり世上に唐物此瓢箪数多くあれ共名物に
を稀也宝物は一之
一 此茶入唐物也よからず
是は又[illegible]
一 薬ハ濃き茶に唐
是も茶薬ろく斑くとある
一 口造り捻返し又何れもよき物也多分ろく花車に
一 [illegible]
[illegible]



長二寸四分半
廻り六寸余
底[illegible]寸

弦付茶入

一 此茶入ハ湯桶に似たる又形大きにちがひある事也
一 此茶入[illegible]又[illegible]
一 此[illegible]上[illegible]
[illegible]
[illegible]
口造り捻返し也
一 蓋ハ[illegible]蓋[illegible]之又[illegible]蓋に
[illegible]時ハ[illegible]中に銀[illegible]べし



長二寸七八分
ツル一三[illegible]
廻り六寸七分
口一寸[illegible]
底一寸[illegible]
[illegible]
高サ

鶴頸茶入

一此茶入頸長き故鶴の頸によく似たり

一此茶色口はさこま揺ゑし一説ニ鶴頸之名物花車形なり

一此茶藥茶色也之上茶ハ胡麻茶之

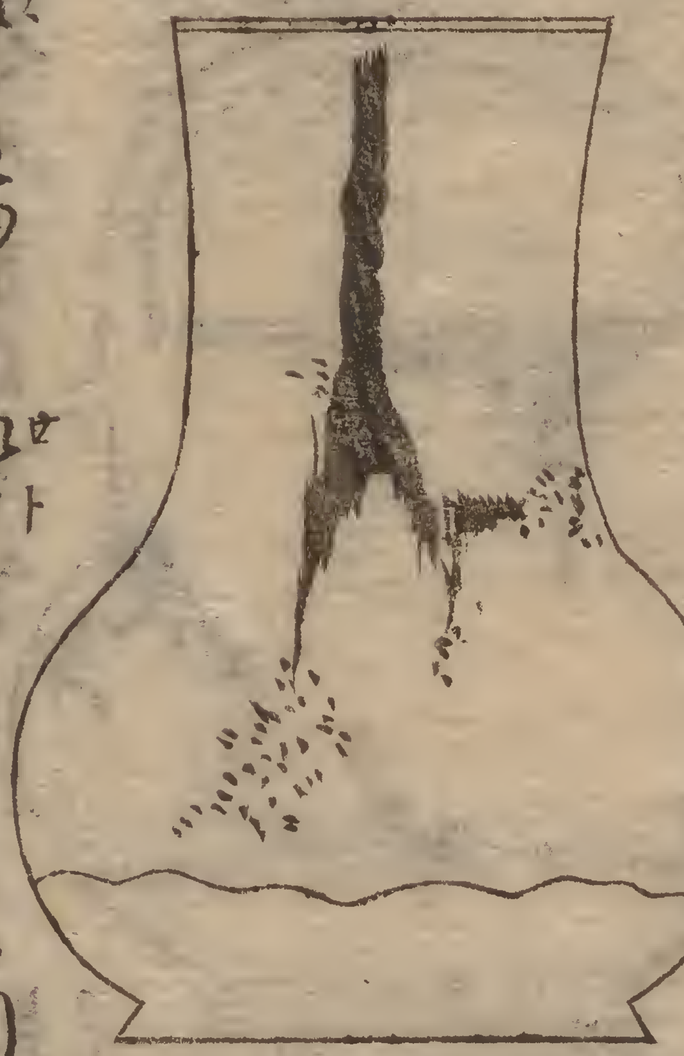
一白手に星あつて此茶入

此一系也

一此形ハ春慶によく似たり瀬戸にもあり唐にもあり

これ無かるもの也此茶入ますく少く今の世に名物の鶴頸茶入

一底の中ニ茶巾トひかり出来あるもの也

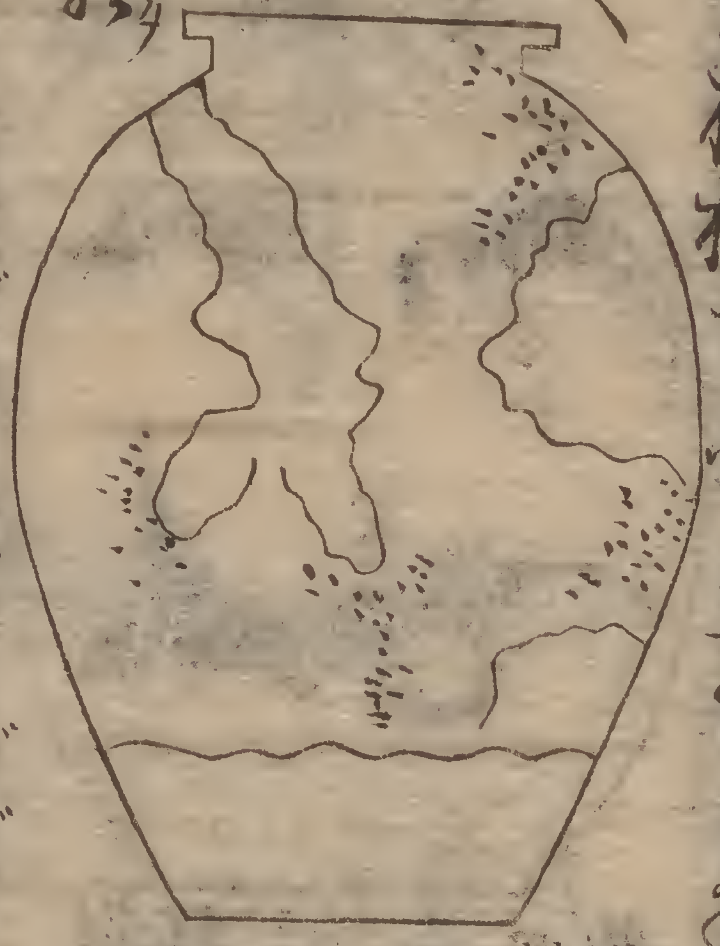


長二寸八分
廻四寸五分
口指渡し一寸一分
底差渡一寸六分半

文琳茶入

一林檎の形に似たる故に文林と云之唐の高宗の時李謹と云人珍美絶妙なる林檎を帝に奉りし帝いかんじ給ひて禄を給はりて文林郎の官に任じたるよりして林檎を文林郎といひける故に茶入のすがた似たるを文琳と云

一云浅黄又薄赤此藥此藥薄赤色艶よし上に流れ下り也ハ此褐藥多くある文琳は形一様ならず八部然れども文琳之



竪弐寸二分
横弐寸一分五厘
廻り六寸六分
底一寸三分
口一寸三分
膳七分

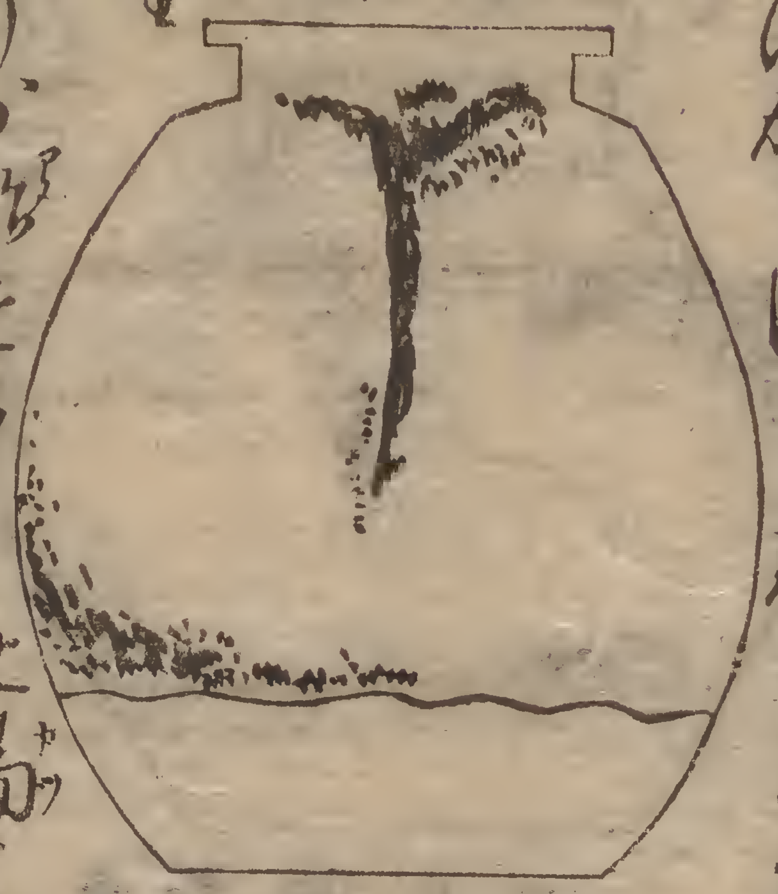
茄子茶入

一 茄子ハ形チよ似たる故よ云也 茶入ハ口せまく捻返し也
糸切あり 露帯之 昔ハ古の本立也 此時ハ茄子を前にて
下角とせし中古利休以来或
ハ肩衝文琳丸壺尻膨
を用ひ結句茄子ハ末よ
なるとぞ
一 地薬黄飴薬之流也 灘ハ薄墨色の飴薬と掛りて其外柿地薬
急かし流しても可し 薬淵ハ厚し 鈍錆薬也 淵は
又底ハ糸切多く一所ハ略とありて可也

竪一寸九分半
横弐寸二歩
廻り七寸一分
底一寸弐分
口一寸一分
膨八分半

尻膨茶入

一 此茶入ハ茄子よ似たる物なれども少しはふくらみたるに依て尻膨と云なり 此付所皆茄子のごとく 底ハ糸の如く
古瀬戸中古より
作り出たる 此作りも
作る也 唐物ハ上薬
一 口廻りほんせ土はひのよ
ゆし古き茶器よ似たる 鈍錆薬也
一 入る茶ハ濃茶也 浅黄又ハ白し 一日和焼ハ土も黒ずみ
茶きた茶もいろいろあるべし



竪二寸弐分
横弐寸三分半
廻り七寸八分
底一寸弐分
口一寸五分

呂丁茶入

一此茶入ハ筋(スヂ)あらく胴(ダミ)ハ太く其あと紫(ムラサキ)の二つ筋ありて高き也
薬(クスリ)ハ黒飴(クロアメ)にて糸切(イトキリ)ある也
和(ワ)物なれども上手の也
且古瀬戸のやうなる物也又
[illegible]なる也
瀬戸(セト)にて作りたる也
日本焼(ヤキ)にて中古(チウコ)の類(ルイ)なり
古き也秘焼(ヒヤキ)八つにしく名物(メイブツ)なる
家に在(ザイ)する也唐物(カラモノ)に劣(オトル)
[illegible]

竪 弐寸四分合
横 弐寸五分
廻り 八寸 弐分
底 壱寸 二分
口 壱寸 弐分合

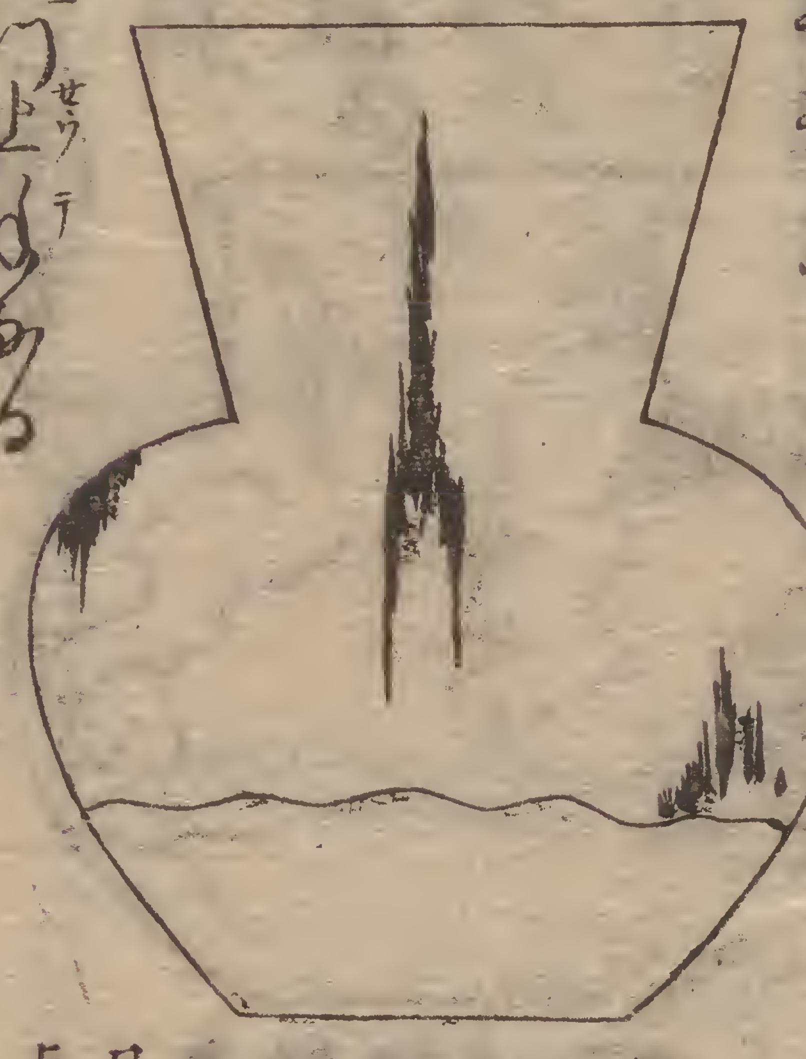
丸壷(マルツボ)茶入

一此茶入ハ唐物(カラモノ)にて茶の八分目ある也 九寸に
茶入也上々土浅黄(アサギ)なり
糸切(イトキリ)あり下薬(クスリ)
飴(アメ)色にて上薬(ウハクスリ)茶色(チャイロ)の
也
なだれ[illegible]
鉄鍋(カナ)のやうなる土にて
一右ハ瀬戸焼(ヤキ)の古き品也
古人之(?)用(ヨウ)大に異(コトナル)之
茶(?)宗匠(?)[illegible]丸(マル)織部(オリベ)利休(リキウ)
焼(ヤキ)ならずよりては此なるよりも
[illegible]

竪 壱寸九分 弐寸(テ)
廻り 八寸 九寸 上トス
底 壱寸 弐分
口 壱寸 弐分

鮟鱇茶入

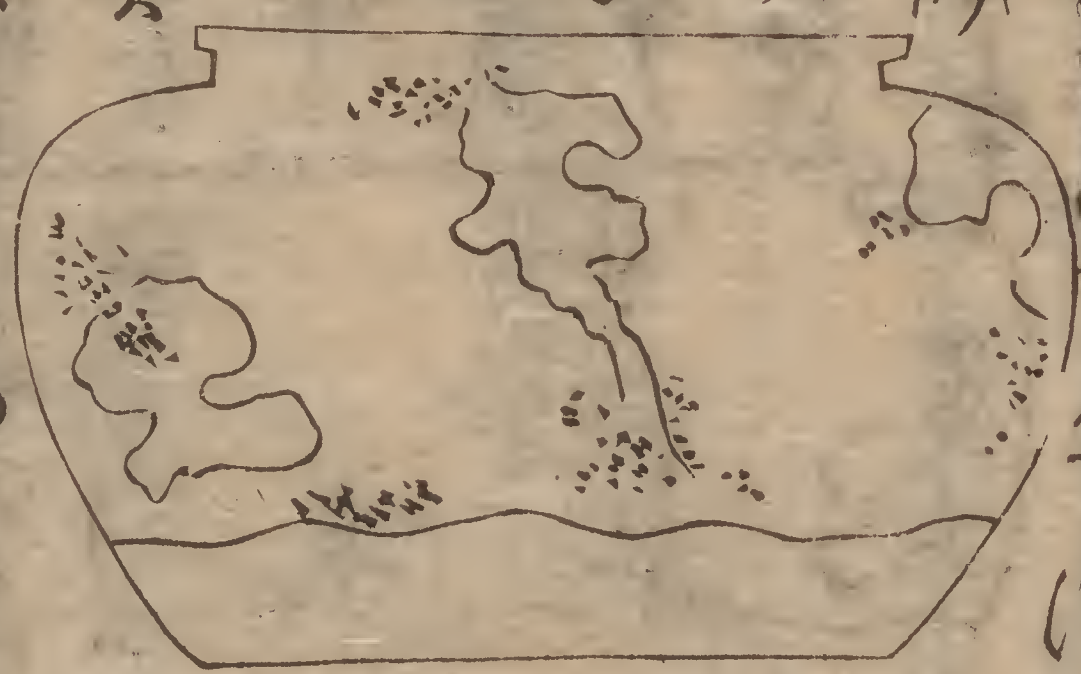
一此かたちをあんかうと云故あんかうと云唐物ハ薬ぐすり
口まはりひねりとしてもんせうなり
古ハ世宗の末まき之下
らもちよし黒飴之上々
黒なるもあり日本
焼ものもあり薬
こまかなる唐物ハかへり上手なる
物也瀬戸焼にも多くある遠州公好ハ別ニテ茶入なる
茶入なり



壁土すな七分
廻り七寸五分
ヨリ八寸ニテモ
底モ寸ニ分
口モ手にてあり
ニテアリ
口ロニ子リカヘシナク
ヒトヘ口ナリ

大海(ダイカイ)茶入

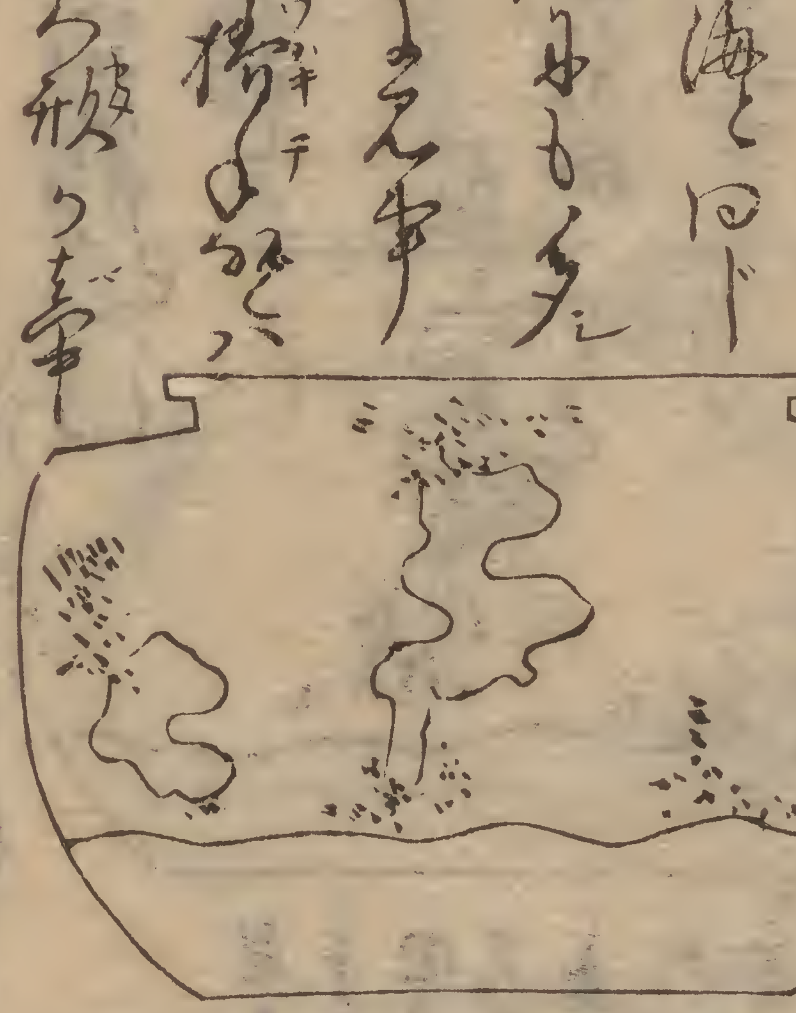
一古(イニシヘ)ハ唐(カラ)物也大海なくなりもの八茶之湯ハなく極
ありし中古より八朝鮮(テウセン)
と云焼して大海自ら
すへあまたなり無二も
大(ダイ)なる此茶ハ湯(ユ)のみハ大海
とあるも茶の末まき之下
茶黒飴(アメ)之とよ蛇竭(ジャカツ)の黄(キ)
茶色(コイ)かつとよかる和(ワ)焼もところくよろしからぬ和焼
多く唐物より茶山ともなく
むく花口ト部茶山券(ケン)底掛(ツハキテ)ちともよまさ



壁土手七八分程ま
ニテアリ
廻り九寸より一
尺ニテモアリ
底一寸四五分七分
口一寸六七分ニテ
アリ

内海茶入

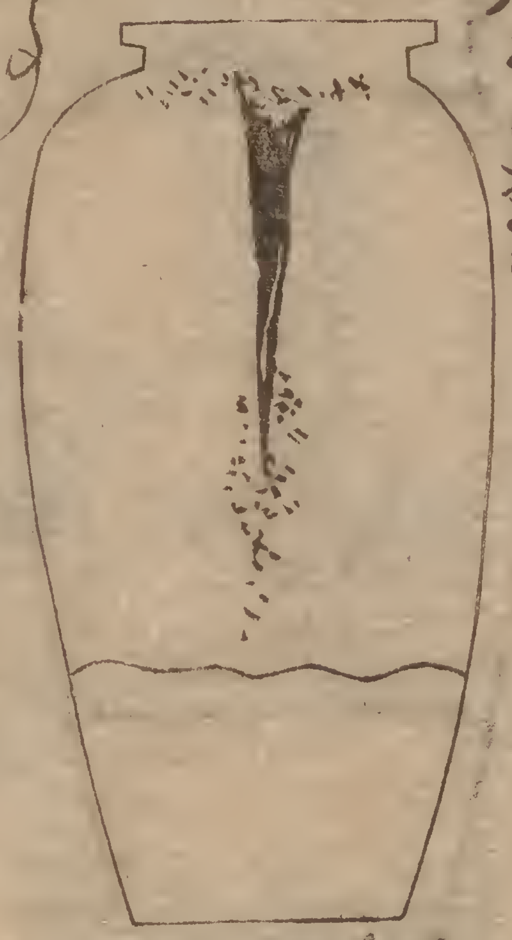
一茶入此様子ハ大海と同事之形の名に付る内海
と云 肩ハ丸きを大海と云
古薬ともあり 大海と同ト
唐物にて日本焼物も多し
茶入ニ景色有ハよき事
あるまじき疵掛ての如くハ
又欠ニ有るも也之 古破り事
古瀬戸此類よくある也



竪二寸六七分 或ハ三寸モアリ
廻リ八寸ヨリ九寸四五分ニテアリ
底弐寸六七分ニテアリ
口壱寸五七分ニテアリ

帯陰帯茶入

一四月十月康済此外帯をかゝるものあり其ハ茶入にハ帯ト
云帯内くなく帯陰帯と云 然共常帯陰ハ中よりも終
云物なく帯ハ是八寸
一多く八底揚よし
一古浅黄又紫茶を
何も糸切なく在り
之口より捻返之連常之 下茶藥写多之上茶ハ藥
黒茶之又藥茶此一節流之 又釉縮あるを何り
割解形のしまる也



長ケ弐寸四五分
廻リ五寸三四分
口八分半
底八分半

角木茶入

一角木と云事ハ的矢の根に成形合よく似たる由にて名付る也 一土落なし 口造捻返し 糸切よし

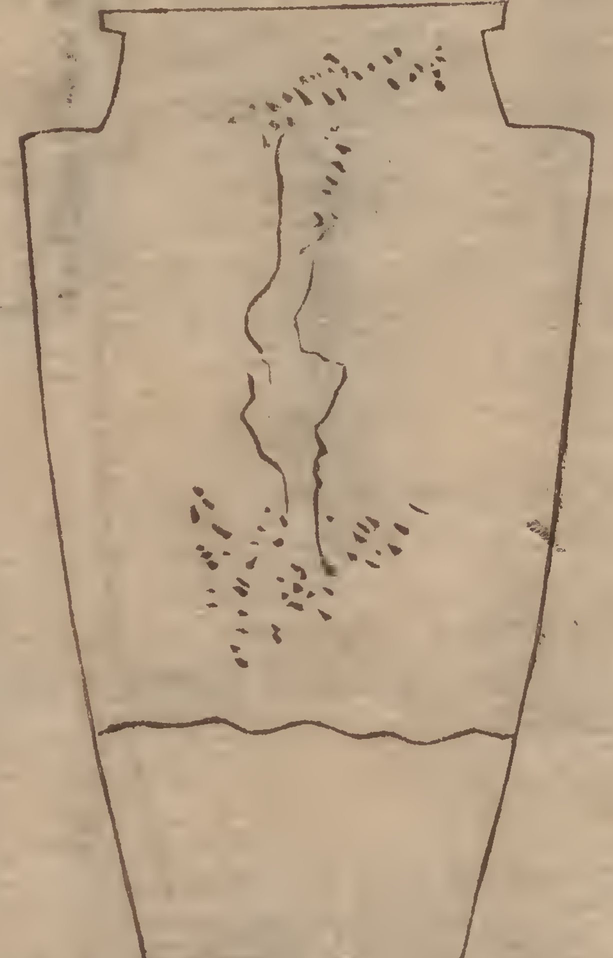
一地薬濃柿色之薬

留まで一はいにくして

薬地ニ上薬黒飴薬に黄飴薬入交りて流し此

捻りなん面るいにしてよけれどもそちよ薬の切りる

ても見も分に景となる也



長ケ弐寸六七分ニテアリ
廻り四寸八分
余
口九分九リン
底八分

面取手茶入

一茶入此姿常かたに面を取之焼の如く無道なる也

拙之底あみもめんを切なる ゲ何ふ也

一土浅黄又ハ赤土も

まま薬面又ハ角也

光強来ハ濃ちやく

細かなる也 足り

捻返し無く賤しき 筒捻し

一下薬柿薄柿又飴黒薬もそ地柿の照る薬もそ

上薬ハ黒薬むらくと一面ニ之其中古此数く

車柚茶入

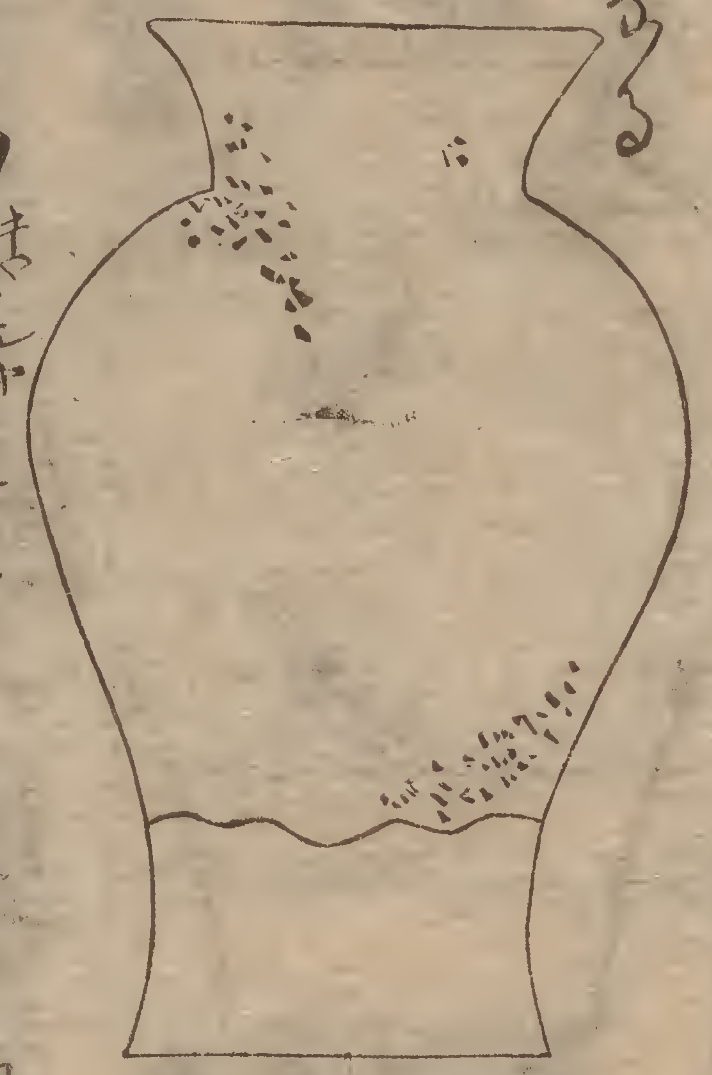
一此名ハ車の軸のことく口まて筋付て柚（くすり）かゝる故云
之ハ中古古瀬戸也作口ニ
一云濃黄色之又薄赤こ
一糸切常のことく甘口
一地薬ハ飴色ニ上薬
濃黒色薬之飴色也
此茶入とも何れも薬ぐし
にもとも古瀬戸之風之又唐物とも見
後物とも云也

有物也と知へし

長 二寸四分五厘
廻 六寸一二分五厘
口 八分半 請口ト云
底 九分半

鈴之茶入

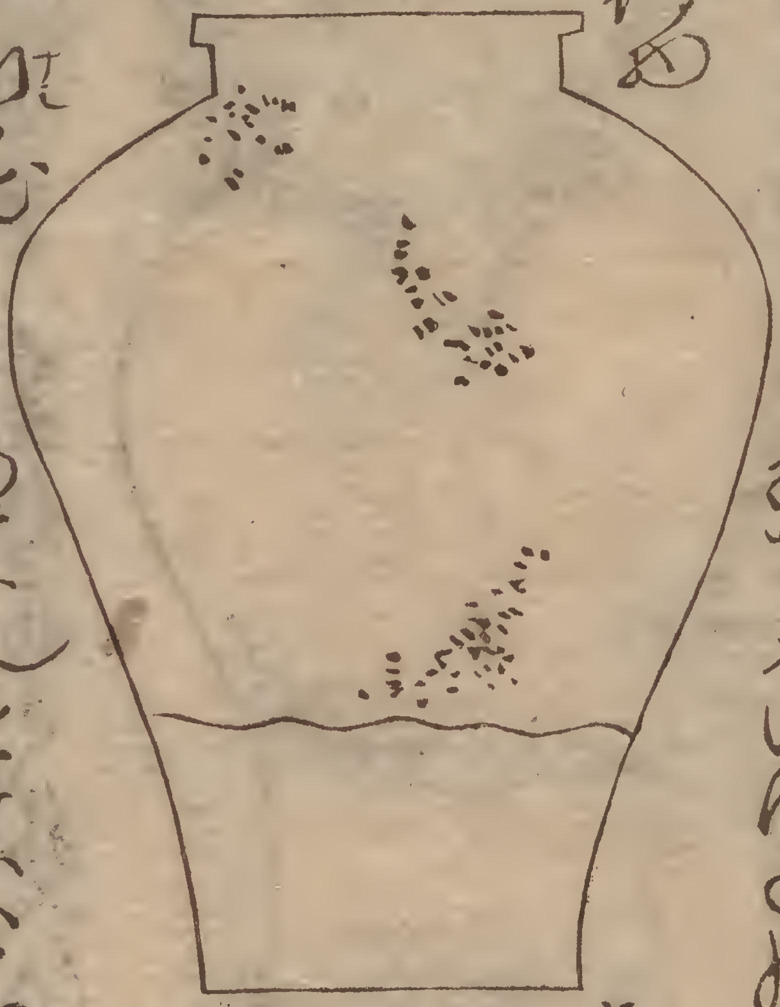
一此成ハ酒器也さく鈴とも云にまた瓶子とも同じ
ものにて瓶子も鈴とも此かたちは盃付なく外へひらきたる
を瓶子と云也くある
と鈴と云遠州云
此作もてゝろと云
一云白色也と日記
足又濃薬にて糸切あり
中にも瓶子に流れ濃黒薬之又茶色薬
底より上へ一色に薄飴也茶色



長 二寸八分
廻 六寸八分
口 一寸毛八分毛
底 九分毛一寸毛

餌畚茶入

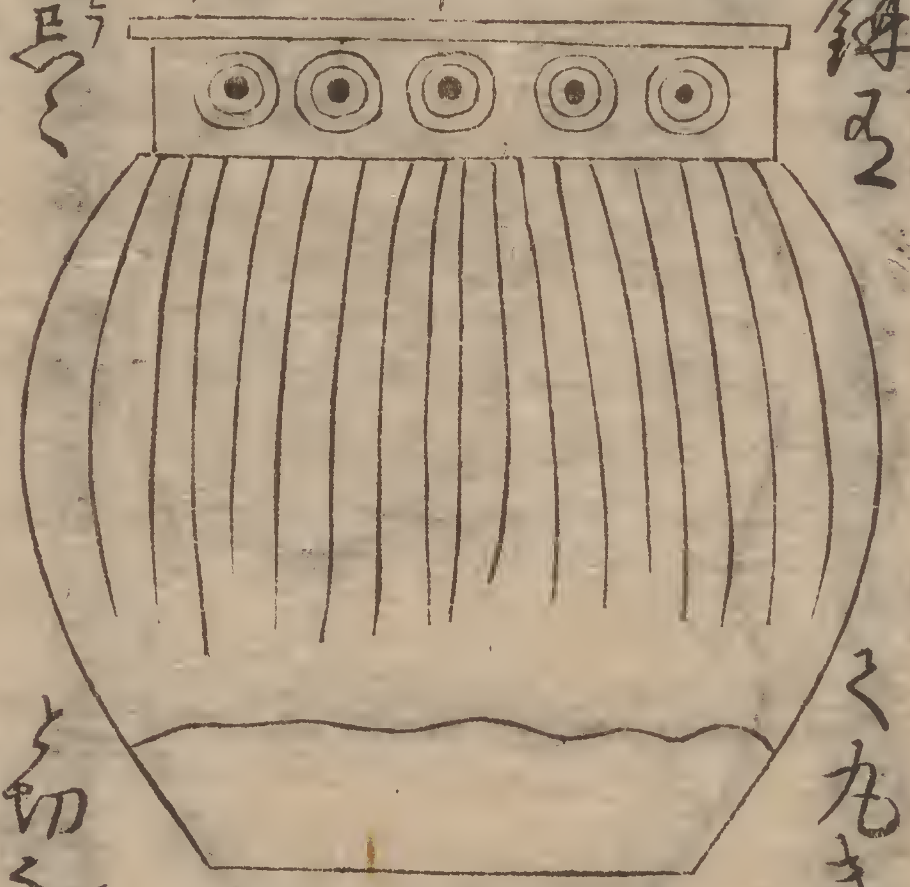
一 ゑふごと云ハ鷹の餌を入る物之體(ナリスカタ)に似たるを以餌畚(エフゴ)と云なり 肩なくなだらかなるもとハ口造も此手なくも有 ゑふごと云 唐物(カラ) 瀬戸(セト)等よく有之 古瀬戸黄(キ)色又ハ白し 口造り捻(ヒネリ)返し糸切有 [illegible] 右此茶和(ナ)花め茶之上茶八分目茶(ナ)を 濃(コキ)茶此外 流(トロ) し此極よく用る之 頸(クビ)躰の之 [illegible] 此かくの如く之



長二寸七八分
廻り七寸
口一寸三分
底一寸余

擂座茶入

一 此茶入ハ唐物にて煎茶(センジチヤ)此茶碗にて用之 其此擂(スリ)物を擂(ルイ)座(ザ)と云 頸(クビ)此口より小鉢(ハウ)有之 く丸き物也 より手擂(スリ)木よ 蓋(タトヘ)で云 湖之 一云爲茶之作り白き小 砂(スナ)の死よりる極之口造り 立延(カヒ)口ハ(ニハ)のよ薄(ザ)之作り 此茶白き物之糸切大方口(ヤウ)て

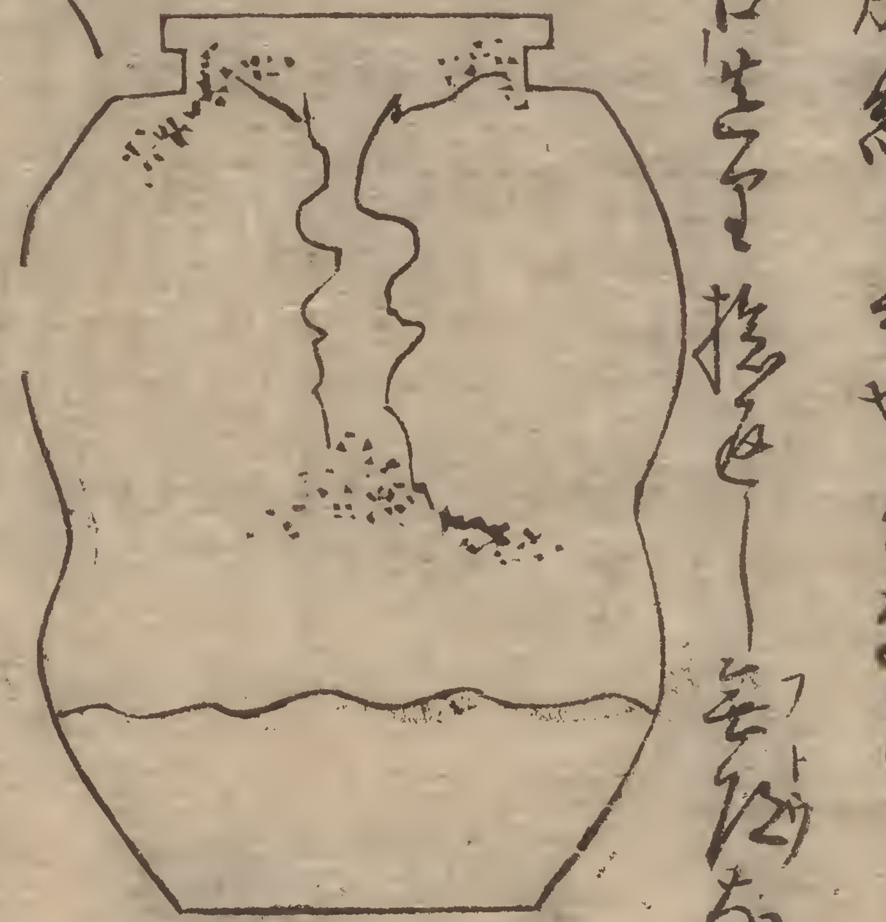


と切之茶入胴(ドウ)よ
長ケ二寸七八分余
計寸二テモ
廻り七寸四分余
口一寸三四分
底一寸三四分

或ハ山(ヤク)形式紹之下ノ茶爲薄(ウスバキ)上茶ハ五ツ 又黄(キ)茶加る色と上と 大方白焼にて紋(モン)を切付茶口にて 前の部春慶之ごときを之

胴縮手之茶入

一 是ハ胴継ニ対して胴縮と是を云なり
一 土赤く此肩衝也 口造り捻返し 蓋有なり
一 糸切蓋くこして
悪き切極之
一 此茶ハ槽多之
一 上薬黒ぐすり也ちらく
とかまり又黄流也比あるもいろ〳〵也此手にお
土物ハ瓦年めく事有る也之元禄ヒ八百年比茶
になる金気薬古ふし上く此茶入之

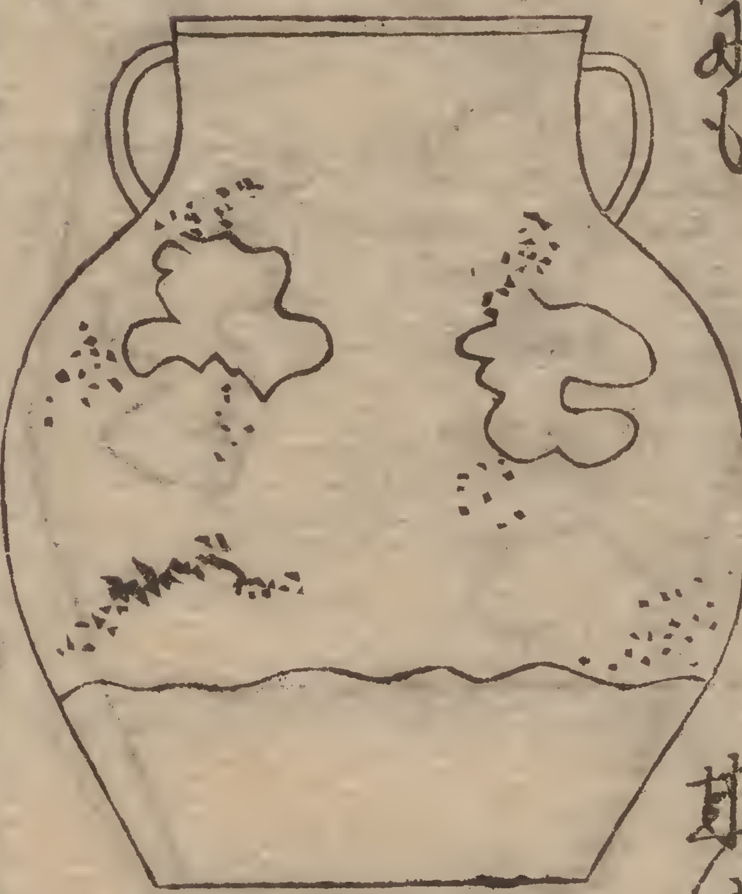


胴継手茶入

一 此名ハ胴張有る所よ云なり 龍様なりしかる物之又胴
高さも之寄中古比類迄 土赤く此肩衝物之
一 口造り捻返し 蓋有之
一 糸切慥こして
切口も悪し
一 此茶ハ槽色多し
一 上薬黒くちゞみくとかまり又黄流也比品も有之
一 此器黒薬也ちらくとかまり也

染付茶入

一 染付とも其付とも云古薩摩に付其多し又唐物にも
瀬戸にもあり瀬戸にも有にも
利休焼鳴海手織部
焼にもあり之
一 浅黄茶入 赤絵にもあり
またあり之
一 下茶 茶葉 飴葉あり 上茶八末茶 柳茶 冒茶此も多く
とまでるも有 鳴海などハ上茶にも釉目 薬かかる之一種に付き
物之唐物に其付八分の一にある物之



其付ノ図

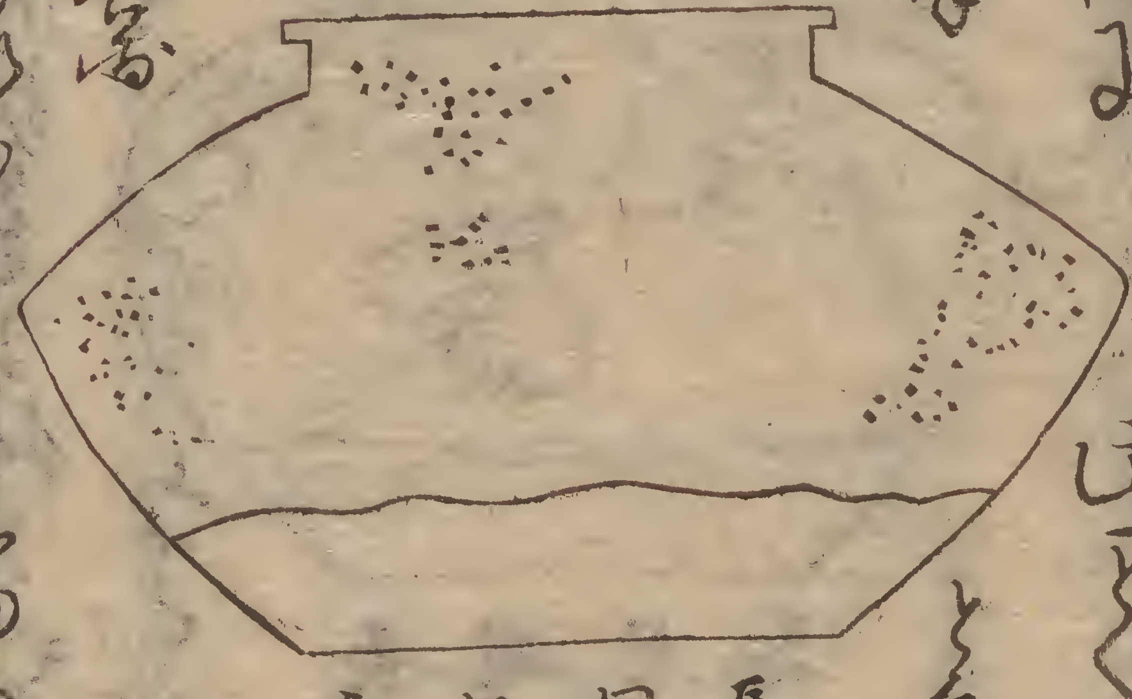
柳茶入

一 此柳成八胴多く張出不柳此にはまるに似たるをもつて絵文
見服とも云頸細く胴多く ふとく増して
織形此服小似たる八喩て
云語也唐物にあり
一 古瀬戸茶入 口より指返し
我常茶入 糸切細く見え
あまた此茶に多く此飴茶之
上茶あり上茶あり黄飴茶交てちらくとある

長 二寸一分
廻 八寸四分
口 一寸
底 一寸二分

達磨茶入

一たるまと云ハ躰図此粒に
に似たるによりて達磨
唐物縺あり此類あり
なし
一古藤赤色也 口ほそく捻
返し好み切たる事之
一下薬柿色鉛よりし当
あまりことよ和薬もなく用る銀のしち立ゆ事也

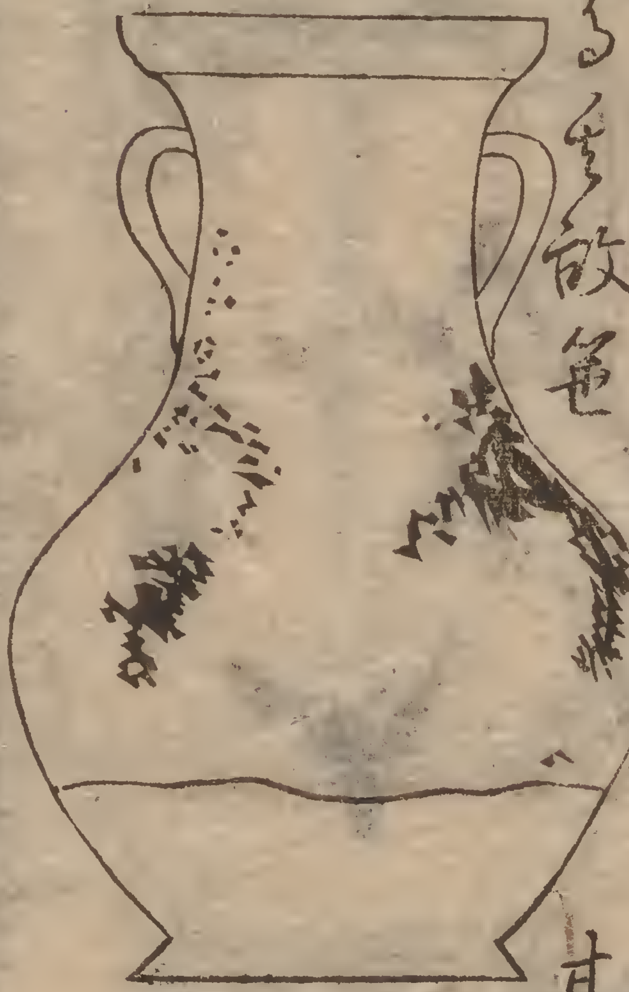


じこくなる體
とも云ある也

長一寸七分
廻七寸八分
口九分半
座九分

笹耳茶入

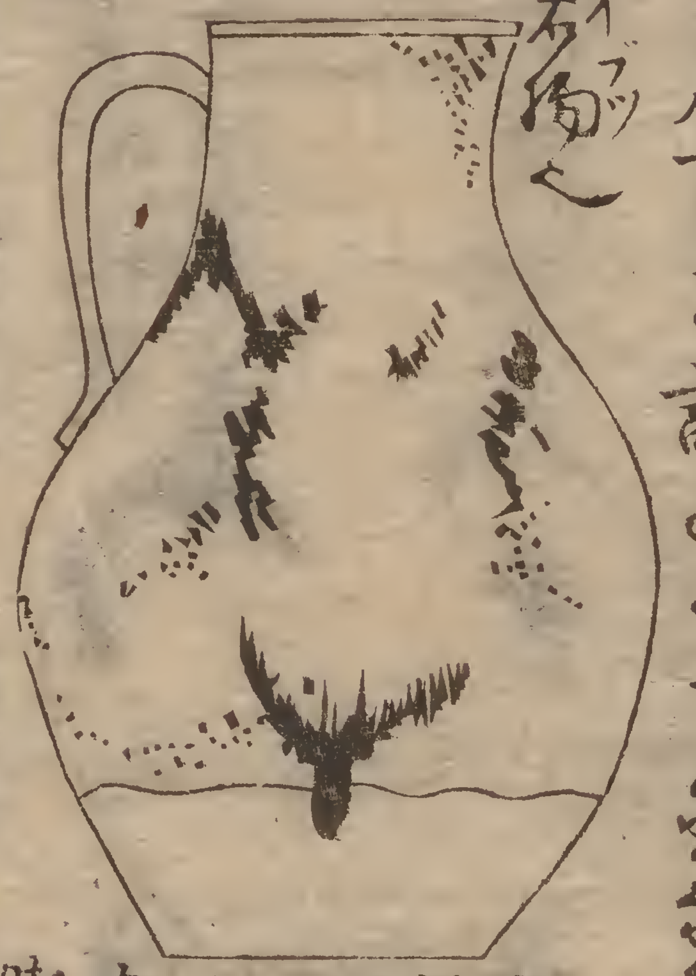
一此笹耳ハ耳とも云笹耳と耳付かあり耳付のわき
にも耳の枕なるを付たるを以手故耳丸
しめて笹にたたみ付たる手故笹
笹耳と云ハ耳をひ
耳と親
唐物古薩摩古瀬
戸あるものなり之
一唐物古薩摩ハ必古
作ありて之 一古高麗赤色ありて物之下薬柿
色又柿色にて上薬黒きもあり又継錫薬
もあるものなり



手縮茶入

一 此釣ハ一方に付たる也 釣片肩にまがりて付たるもあり
然れどもまがりて付たるハ古き計なく下手物也 棚飾
立ざれバ釣の付たるハ名物之
古宗丸下摺ハ手下也
名物なり

一 たまくハ之下茶
薄茶 上葉 濃茶 茶[illegible]
[illegible]入[illegible]茶[illegible]



長 三寸一分
横 二寸五分半
廻り 八寸二分
口 一寸 三分半
底 一寸 六分半
膨 一寸二分

文茄茶入

一 此根本ハ文琳にもあらず又茄子にもあらず太閤
秀吉公文字をもって文茄と付
給ふ名物也
持手ぬれ[illegible]
此形世に稀なれ也

一 古[illegible]白[illegible]
[illegible]口[illegible]捻[illegible]糸切

一 此茶[illegible]
比[illegible]茶[illegible]

長 二寸二三分
廻り 七寸七分
口 九分
底 一寸一分

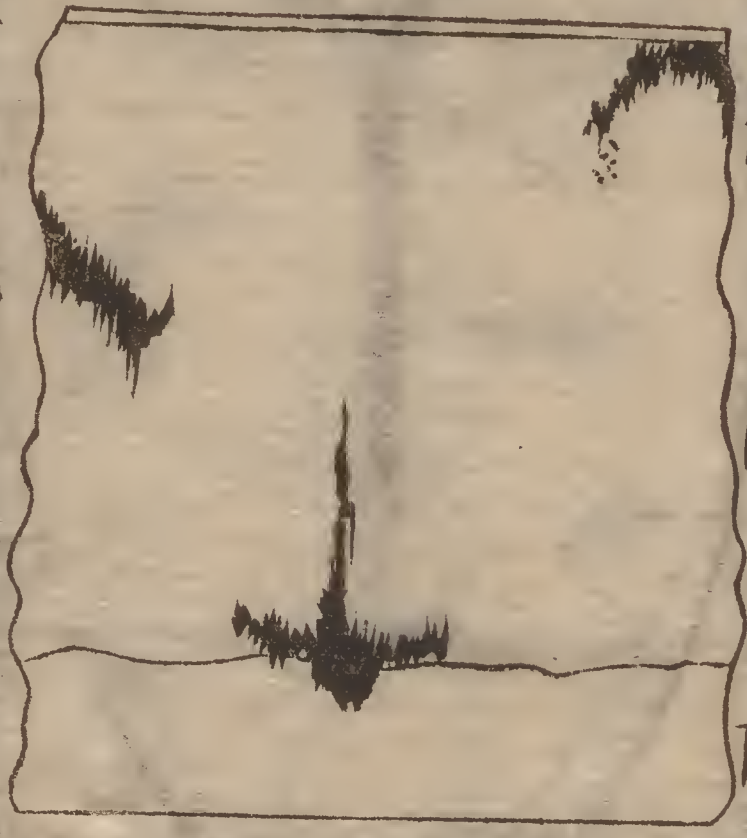
西施茶入

一此なるはきつひかりもしくとして美人の體よ似くる
ごとく西施と付くると云 唐物なれとも目あれとも三
拾目余なり
一土白いろ又浅黄
一下薬藤柳上薬
黒し所々かしこまに
鉄釉し地を用るはや餅きまなる也之世にもち入る
なる茶入也入れる人希也之

長二寸七八分
廻り二寸二三分
口 八分
底 八分

棒之先茶入

一此茶入を棒の先と云事ハ茶ひ杓の先にて切たる様ニ
見え候故に名付けるなり 古瀬戸なり 形
珍奇也之
一土 瀬戸に比し 雪色なり
糸切 ならしにてある
趣きあるも珍しきなり
一下薬と上薬も有り 黒し 所々はけあり
糸目しまりよし 所々ひびきあり ひ〇〇を返し
もみく口まわりも切る様にて薬かゝるなく



長ケ弐寸一二分
廻り七寸二三分
口壱寸七八分
底壱寸八九分

芋子（イモノコ）茶入

一 此形（ナリ）ハ里芋（サトイモ）の子に似たるゆへ芋子と云 寸ハ九歩まで
肩衝（カタツキ）に付たるを上とし　なる由あるなり

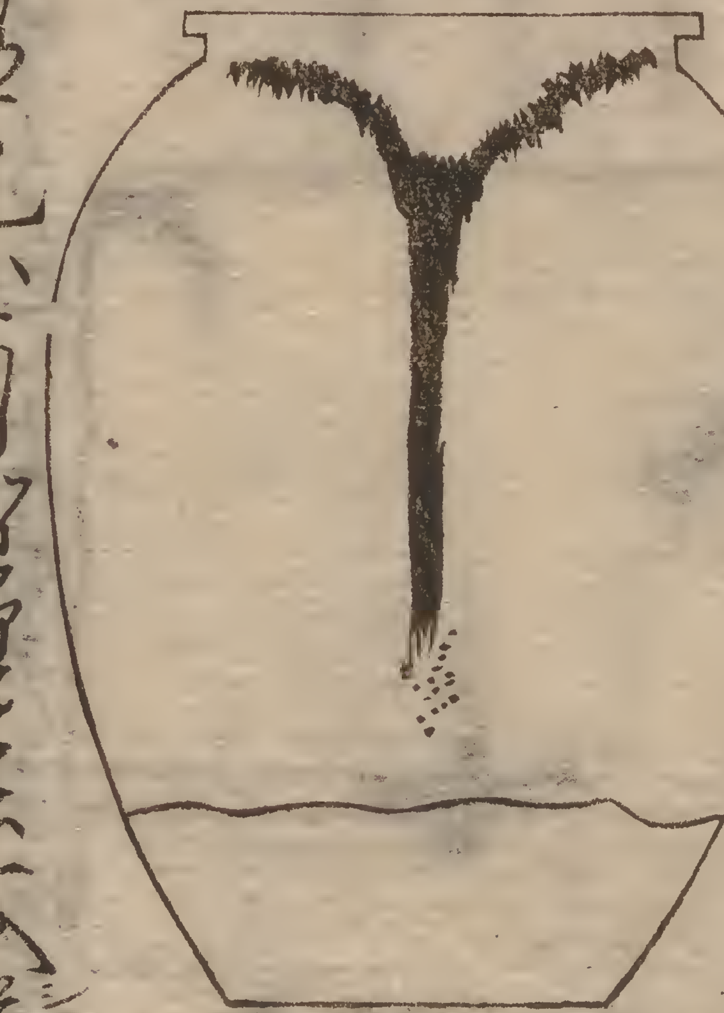
一 薬ハ茶色又ハ浅黄
もまた古瀬戸ハ水薬か
なる口造りを指匠とす

一 下薬ハ濃柿（コヒカキ）に候

又上薬ハ薬黒薬また是ハ一つ切なりと云 一入書（シャウクワ）也

一 或ハ薬黒薬に黄（キナタ）流也又黄飴薬此飛（トビ）薬かゝるもあり

一 茶入ハ元祖ハ三百年余にある



挙底手（アケソコテ）茶入

一 底（ソコ）を摘（ツマミ）ひとくに上たる如く但摘底（ツマソコ）ともいふ

一 古瀬戸茶入ニ多し右同（イレノ）此摘手に

近し 丸底奇麗（キレイ）

一 下薬濃柿（コヒカキ）にて上薬

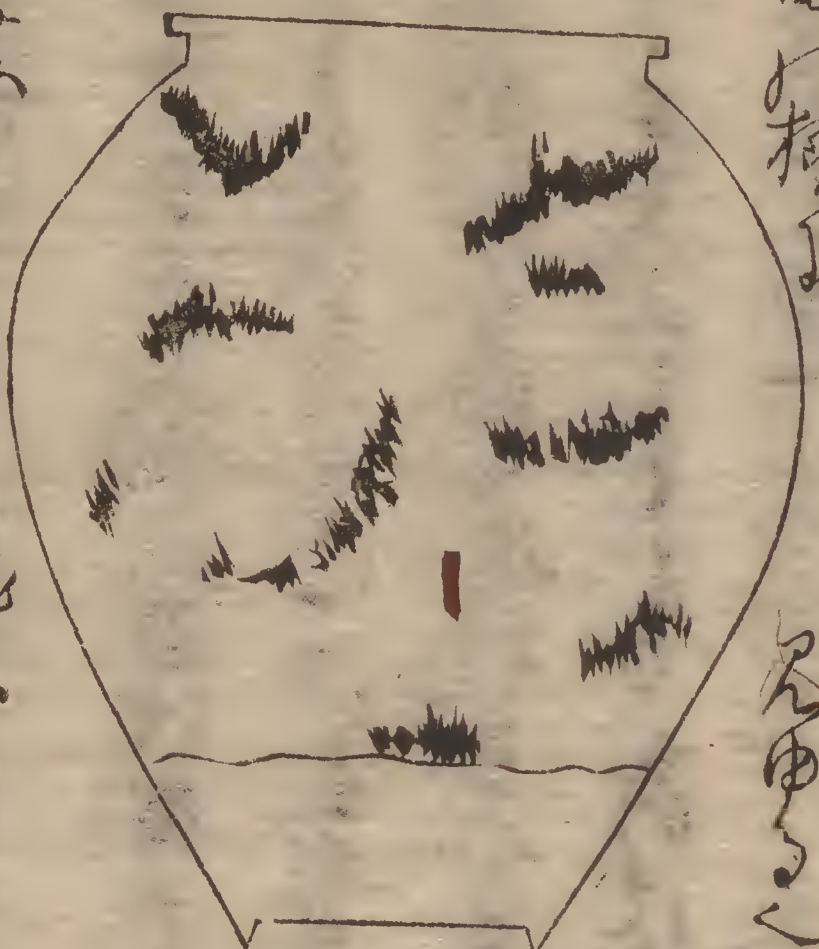
薬黒薬と濃黒薬此

なとく是（コレ）にて掃出来（コレ）薬

濃黒薬にかし黄飴薬まじりて此薬よりかゝるも入

掃（コレ）を裁出此之部すハ八分ほとか出る又薬黒を此所（カリ）ニ去

又濃黒薬一色此上底（アゲソコ）も一通りにて芋子茶入と同前也



長ケ二寸四分
胴リ七寸四分
口 二寸
底 二寸一分

追加茶入代習

一思川手　一百年に及ぶ古き物に似たる也之　茶色薬ゆるく流
出るちいさき口也

一底面手　一百年に及ぶ中古茶入底の面埃なきにて金気
薬ゆるく薬なまに流出たる也之　紀甚茶に似たる也之

一襟屑手　瀝紙手に不絵座付たる也之　遠州公人に賞せられ跡
くろく左様なる茶入にて作代中よりきたる
と見るこそ出来たる也之

一打出手　新百年にみえ色大津ゆるく氣出し鉄の薬
打出しと名付その比茶入多くゆるく飴流出する

肩付ぎ口に付　新は六七分とる茶入無比梨地
さまざま白し文様ときさる物之

一芳波手　百七八十年に及ぶ此茶濃柿ゆるく流出る

一清水手　百四五十年に及ぶ吉羽手土下にたる也之事
清水手と云飴茶ゆるく薬切たる也之

一ろぬき　脇より薬なし依てまとも春慶に似たる
也之　多切丸く多切たる也之　肩に流出かかる

一八重焼

一隙焼　上薬なく水薬たるなり

一天竃物　遠州時代　尾州焼之

一 そゝ野竈 利休時代 家名也
一 かうらん焼 利休時代 作者此名之處ニ於葉比類なし
一 宗伯焼 利休時代 作者此名也
一 つまき座 中古座より指此名なり
一 柳川
一 山比神 山比神より出たる茶入也 必是風なり
一 八橋手 中古より是比名八橋に似るとも
一 小むらさき
一 古備前 中古たちき葉あり
一 厚手根接 葉入なき物也 厚手と薄手より日傳有之

一 金花糸 古ノ儀より八二百年ほと以前也しかし
一 みを口 口廣之處丸き也
一 四度焼
一 瀬戸竈 尾州なり 利休時代
一 瀬市 是も古き瀬戸竈此作と云
一 肥後焼 あまり見えざる也
一 瀬戸唐津焼 利休時代 作者と云
一 兔四郎 或日藤四郎 与三四代相此名と云は説有
明之二代目を加藤四郎と云 是略して藤四郎と云
如此代々名人多く子孫今に瀬戸此窯に是有

治此上様此物語に免罔師と云座に書付たる壺有
と調しらるハ免罔師と云作者何と附られ古今名人
此時代の只ハ須羅山のことく似せもして其右ハ高さに似たる
名をも付事何も此作者由も見えず之手数かるらん
一 楽焼 茶碗此ことく古何々其ハ黒きも赤きも有
又黒きと赤きと飛入たるも有事之利休時代此
古きハ高直なるもの也
一 菅波焼 是ハ二百年もにあたる此ものの世にある也加賀の千と
云者何する事之加賀土茶瀬戸郎に習候てなしたる菅焼二
十古寛永之比故に云るなる広沢のも能似たる也之

古ハ必茶湯に成もの有る下ハ茶かき上ハ茶入之きり流也為之威
八座張なく広沢之形ハ自利ハ広沢なく秘蔵是識此
広沢とハ大なりちがひ有るもの之成に古き此伝に又伝之
一 万古焼 是ハ唐物の成物をとして京柳此る瑞之茶下ル
同ありく焼なり七十年来よりある由へ来る法もあるく頭つらく
也よも切なる物之ハ能通多し自然も出来此能何まても
見へ宝之ものにいふかるべし
一 古き物に広口なきも多く丸壺文琳此なひよき
心付け座なくともさしく不待なく座に無點此茶
此湯に行ひ伝し茶入もこも一服に能きにへ心需

一 なまなる色を焼くる色バ底の所めく八なくどこやらに嫌味(イヤミ)有
茶かくしむけくを堅き葉も茶を出たるもの重やうなる
然とも不器(ウツハ)茶くどことも無く古風らしく筆紙(ヒツシ)にも
盡(ツク)しかたし是ほどよく書置(カキヲク)面影(オモカゲ)名人(ユウジン)の気を分族て
おのれはうり自然(シゼン)の所めく出来べしこうく目利(キキ)ハ重宝
能よ所ある以心(イシン)伝心(デンシン)秘(ヒ)事べしく
一 粟田(アハタ)口焼よ底の所を似せたる多しかなおとく大事
一 こもり池焼 白きち下薬黒しし上薬茶色流したる
一 越中焼 なくく上手此焼物ふ瀬戸薬よるる黒ぐもゆなる
おふくも御(ヲリ)も能之外(ヤ)瀬(サ)山めく焼之

一 御室(ヲムロ)焼 仁清(ニンセイ)と云者上手なく薬の色白土下薬焼
上薬黒く白よもる白薬黒ふかくも有る
一 上薩摩(サツマ)焼 青土 柳葉よ白き絵焼(ヤキ)ながら有る
一 伊賀焼 此茶入る 白きちよ白き かいらきあるよ
あまま茶よ此ぶんに出る
一 九谷(クタニ)焼といふ 加州大聖寺 利治(トシハル)公の好にて
後藤(ゴトウ)才次郎(サイジ)と云者を對(タイ)して遣焼物此次郎を習しめ
九谷(クタニ)と云おハ奥山(ヤマ)焼ち八底薬くて下薬も黒く文
柳葉もる黒き流たる 利治公の地頭(ズキ)おもめく絵を
此織(ヲリ) 如し 九谷焼も 三代(ミツ) 祭 ... 八上らく此絵ある

べし中範州云世よ多く伝る茶をとりきくひろく
ある剣後ふ陸ら孤ハ無類此茶入之自然求得人あらハ
ハ重宝之
糸切之沙汰

一 丸糸切

此糸切ハ上作物ニあり瀬戸ニも
目かをくよ又由るべし

糸切是ハ右廻りニあり瀬戸焼
此糸切ハかくのごとくよはりて切
新焼ニ

底物此糸切是ハ左廻りニ也
底物此手趣之外此茶入ニあり
希有事之

箆起底ハ撥つけたる底をへら
にて板起しけるを茶入の下
地とし生のまゝ箆起しにて上より
押て出したる故板目あらはる由
なる也

渦糸切といふハ糸くいよく渦にて廻
也大瓶に有ハ必ず内外に有るべし

○釉ハ国にもよるハ茶入の底を九く付
る也ともいふ又口のまゝの底を立て付くる
をしく指の出たる所くきあるあり

土之次第

一 唐土 白土 赤土 黄色土 唐物に似る土之

一 白土 浅黄土 藍土 朱土 土器色土 田土 瓦土

一 緋色土 緋色ハ絵焼て赤みて緑光ある土之
和物之焼物に有之

一 漆土 土を何篇もく水飛して洗せ茶入に作る土八
また此土と云ふ茶入御釜師にて唐物の写しに見る

薬之次第

一 青薬 渋薄く茶入に多く用る事也

一 黄薬 渋薄く上薬渋め飛茶にて有るべし

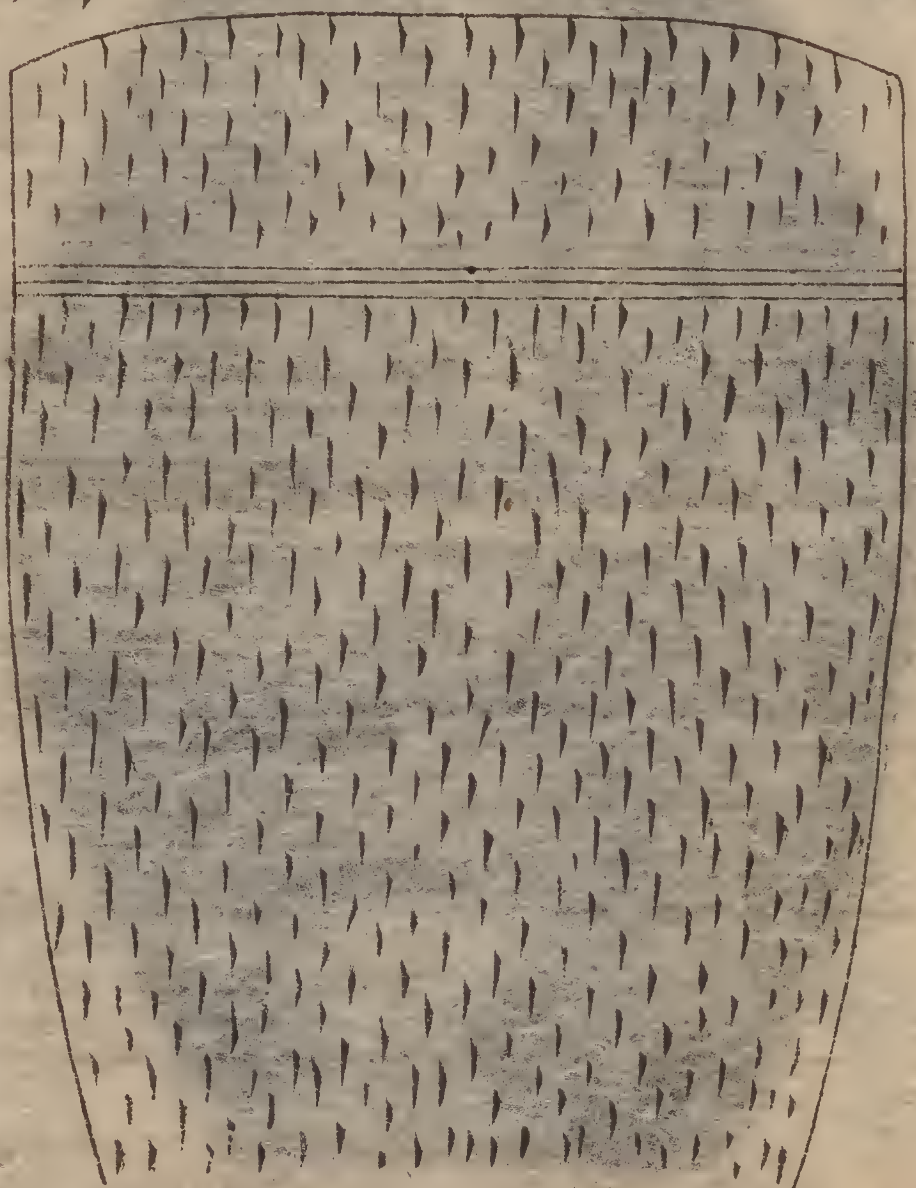
一 柿薬　濃薄下薬よ隔て一面よかゝりたるもあり
一 白薬　薩摩焼織部焼拔貫等よあり
一 黒薬　濃薄艶と かゝりたるを云
一 胡麻薬　生海鼠薬青江なとの上作物よある薬之
一 阿蘭陀薬　小砂の交る如くあらく さらりとして地膚の見ゆる
あまり薬　擂物作手の形よ作る也
一 蛇蝎薬　蛇蝎の如く薬唐物瀬戸焼あり
一 海鼠薬　青海子の如く網目よかゝりたる薬之
一 朝顔薬　黄薬のかゝり流れたる薬之
一 飴薬　黒飴糸の黄色多く極りたるあり

一 茶入　茶入をさまざまくあり
一 金気薬　錆色を見る如く黒くも赤くもあり
一 水薬　薄茶の色を云 水気薬を云 但し大分又ハ薬溜
りとも切目よかゝる薬之大海芋子茶入必有之物之
一 梨地薬　銀梨地をまきたる如く上作物よあり
竈所之沙汰
一 瓶子竈　唐物唐物を焼と云へり
一 祖母懐竈　此所をうちがへところとて入上作竈之
一 赤津竈　此竈八郎兵衛名字を赤津と云上作也
一 信濃竈　信濃の者陶器焼しく焼上作也

一　蕃木竈　不此名之上作也　大萱竈　不此名上作
一　落合竈　一不此名之上作之　鳴海竈　不此名中作
一　鶴竈　下作也之　大平竈　下作也之
一　伊勢竈　伊勢焼　茶碗めく焼故之
一　大竈　此竈此焼物ハ京都の新手物又ハ末世ニ及ひ
至宝たるへき物之　俗ニ殿様竈とゆへり
一　新竈　分　京粟田口　河窯　清水　ここら焼　楽焼
瓜焼竈　江戸・京　尾張竈・ゐかへ竈　萩焼竈
砂中竈　加賀の串竈　薩摩竈　此外国くにおほし

挽家之圖

有衡　文琳　青江手　茶山家写　飛鳥川
廣澤　生海鼠　捻黄　メナヤサン　紫檀　クワリン　黒檀
鮟鱇　耳附　車軸
呂丁　鉢羅　樽
真弓　碁子番廣　橋姫
玉柏　落植　元総写
雪柳　黄葉　柳手小川
天目手　野田　柔目　化手　鈴虫落　青羽手　口廣



右之類此茶入挽家ハしけなめと可

・中次攪家之圖　黒ヌリニ紫タン、シロカキ　メガやけニ、シクリニトチ

尻膨（シリフクラ）　茄子（ナスビ）　飯銅（ハンドウ）　水滴（スイテキ）　大海（ダイカイ）　内海（ウチウミ）　丸壺（マルツボ）

油桶（ユトウ）　手縮（テジメ）　柿（カキ）

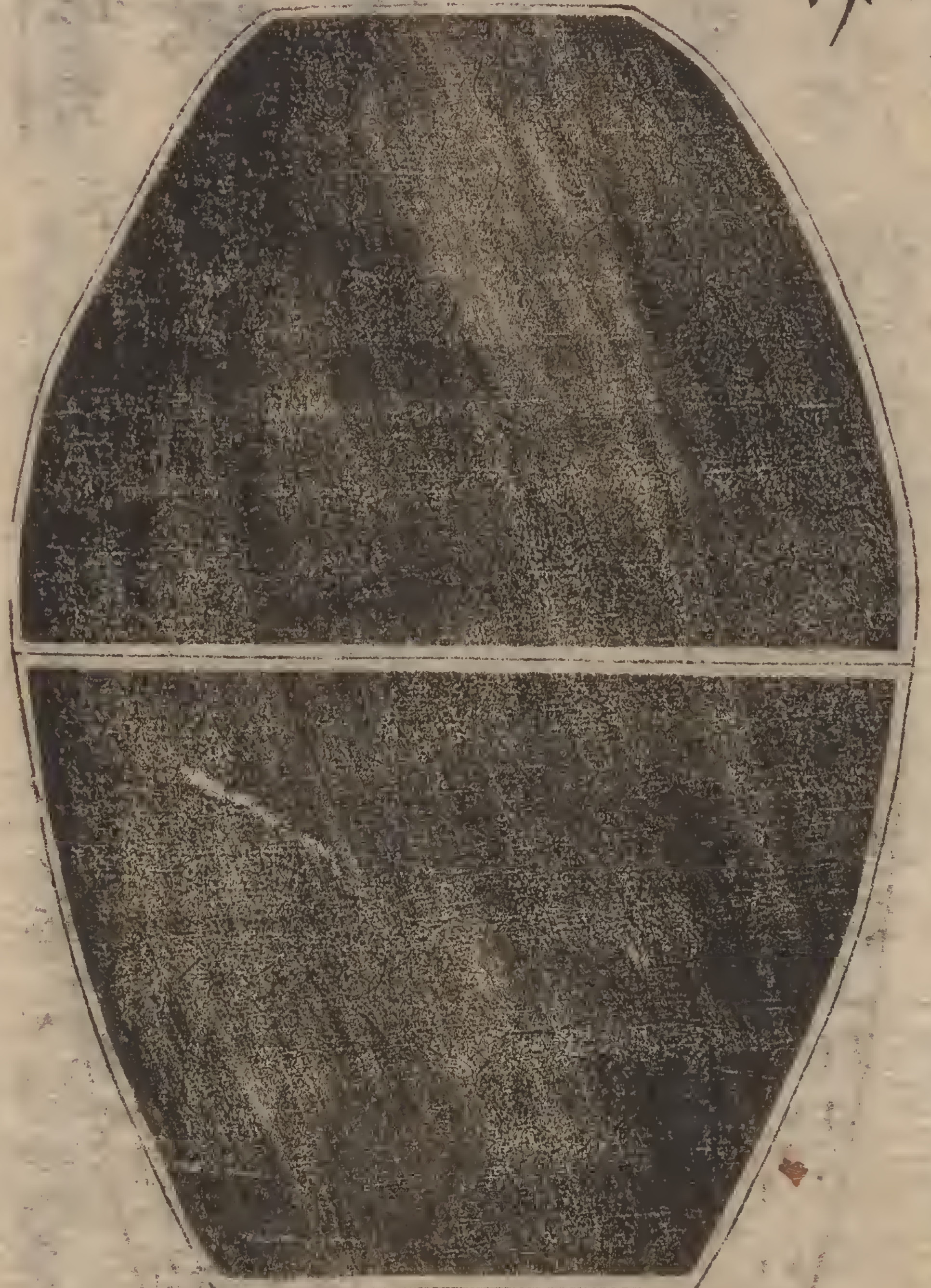
達磨（ダツマ）　鶴首（ツルクビ）

棒先（ボウノサキ）　累座（ルイザ）

文輪（ブンリン）　弦附（ツルツキ）

瓢箪（ヒヤウタン）

右此類ハ攪家ともいふべし



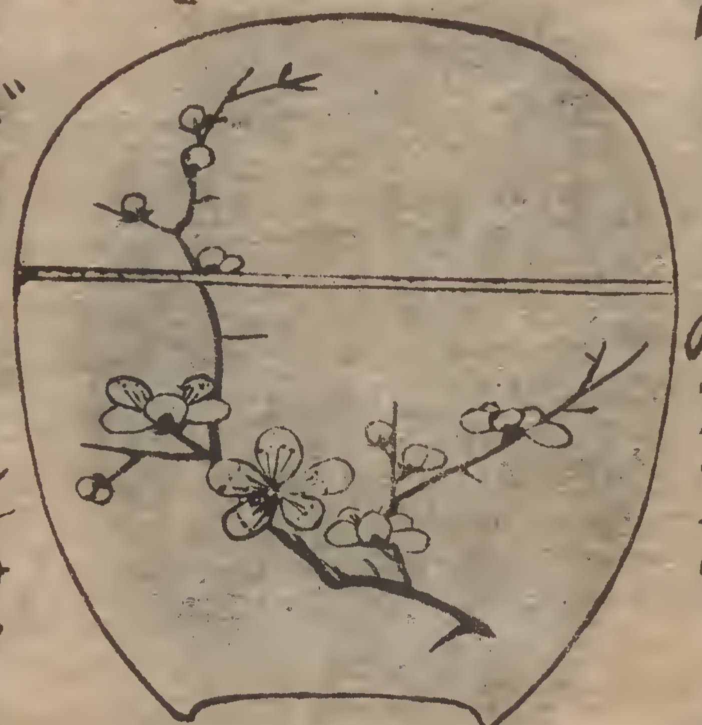
棗之圖

一 東山義政公（ヒガシヤマヨシマサコウ）　信長公（ノブナガコウ）　太閤時代（タイカウジダイ）ハ古蒔絵（フルマキヱ）也

行ハと　利休作（リキウサク）ハ黒ぬり之底（ソコ）に朱（シユ）にて判（ハン）有也

真棗（シンナツメ）

丸棗



一 黒ぬりの上にまき絵（ヱ）なし如此（ズキ）なる新作（シンサク）なり

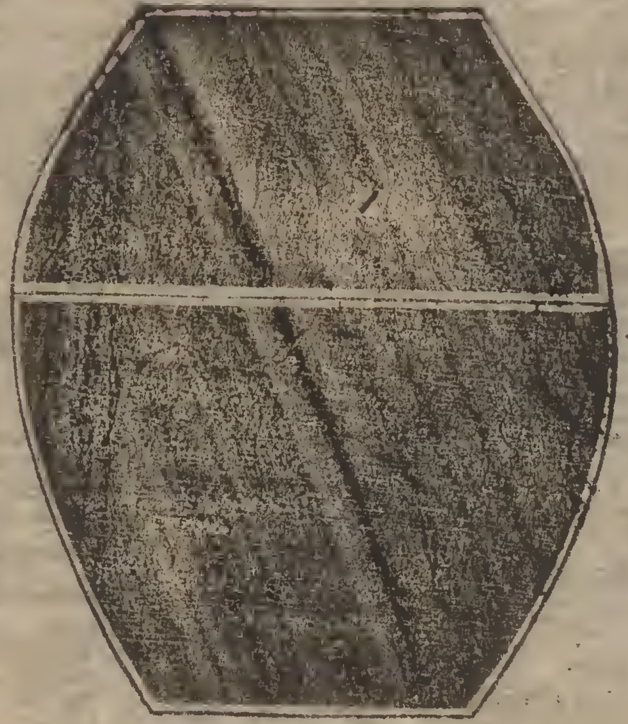
一 丸棗根来物（ネゴロ）鎌倉物（カマクラ）古作（コサク）之ハ千利ハ黒ぬりに蒔絵（マキヱ）

此外ハよきまき絵也

一 小棗(コナツメ)は袋(フクロ)入にして新(シン)塗(ヌリ)は無をを蒔絵(マキエ)するを
新しき時ハ薄茶入につかふゆゑ所き(ガ)なき故
にんみやくはもの(ミ)をもまきくらべしあり十日も
重くあつかひ茶(コト)をたてべし

黒塗(クロヌリ)
小棗

中次
棗

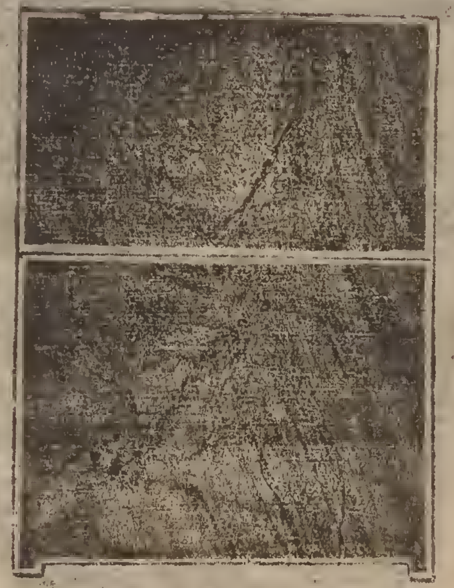


一 平(タヾラ)棗(ニキ)ハ蓋をとりて(?)もちゆるは八茶持(チャモチ)は能(ヨキ)塗(スリ)桐にて会家
新(ニ)所道丸(ニルタ)き所ハ八(ヤ)幡(ハタ)屋新茶よ納(ノウ)停(テン)仕
蒔(ラキ)人十日ほど白濃(コイ)茶入置(ヲキ)ても色もかハらず香(カ)も...ね

よき(ヨツ)能茶(チャ)を持(モ)つ之
大中(ナカ)継(ツギ)時(ゴ)代(ダイ)蒔(マキ)絵(エ)あり又無地ハあるべし行り
中継(ツギ)ハ多く八袋(フクロ)なし薄(ウス)茶(チャ)入りに用

大中
継

黒塗(スリ)
小中継



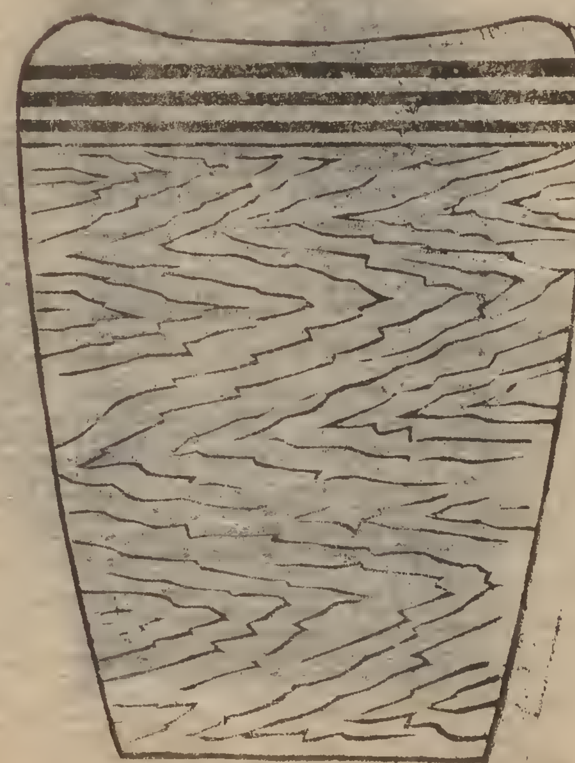
一 中継(ツギ)のハ茶入桐にて附(ナラヒ)て一文字よもの(?)をた
く入べし 小中継ハ桐(スキ)箱に茶を入べし是
あるひはあり

一ひやうたん中續(ツギ)皆朱(カヒシユ)ゐ黒ぬりまて勝くぬり分(ハナ)

ぬもあるへし

皆朱(カヒシユ)のひやうたん中継(ナカツギ)

利休形(リキウカタ)の頭切(ツキリ)



一透切(スキリ)ぬも利休形(リキウカタ)織部形(ヲリベカタ)なとくミ下ぬ木地(キヂ)ぬく挽(ヒキ)

たるもいろく此物数寄(ズキ)によるなるへし

一食籠(ジキロウ)棗(ナツメ)色々此外蒔絵(マキエ)色々有又皆朱(カヒシユ)ありて多(タン)く

ぬりも分(ハゲ)ある也此外にも薬器(ヤツキ)と云一物(イツ)ぬり物也是又八分香合(カウガウ)ぬ

ある又唐物の紅(コ)塗(ヌ)りと云物ありて又八堆朱(ツヒシユ)堆紅(ツヰコウ)

此類(ルイ)も多き也根来(ネコロ)物鎌倉(カマクラ)なとゝいふ也皆(ミナ)薄茶(ウスチヤ)

入にて道具(トウグ)之事此類なりと云ぬも八濃茶(コイチヤ)を入る事なし然(シカ)れ

もなし

一薄茶入といふハ焼物に形南京の手の絵に
きれいのもの多く薄茶入ニ用ゆ絵ハ色々あり又
形もいろいろありかはるの壷なるもあり

中継

一なつめハ中継を遊ばるに金らん手も
あり又壷形に金らん手もあり又織部焼もあり
く異風なるもあり

天目

一建盞ハ唐にて山の流る川の中自らできたる
を唐より渡してよき茶をうけたる由毒を
去るを以て用ひ純とある也

建盞

金銀の覆りんをかけたる也

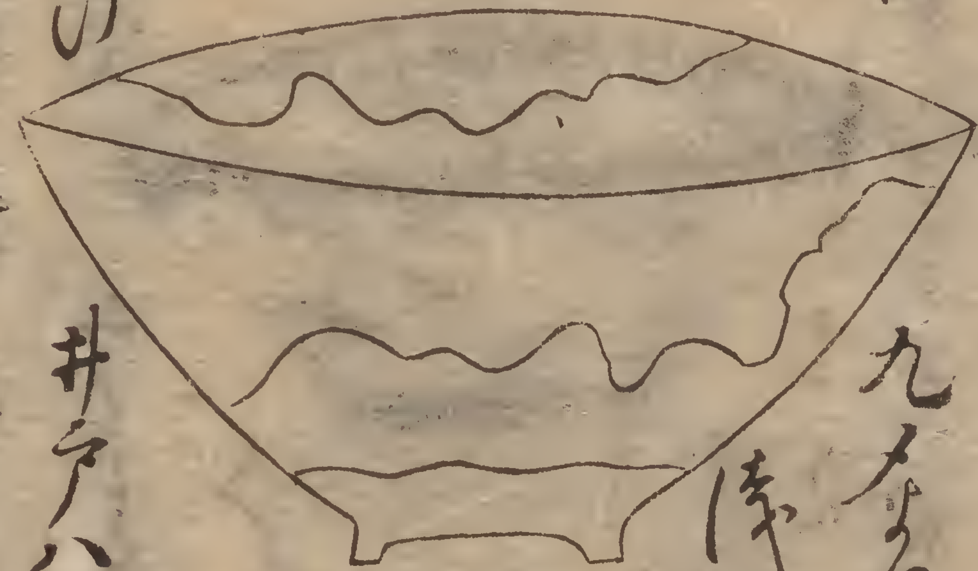
大ひ盞

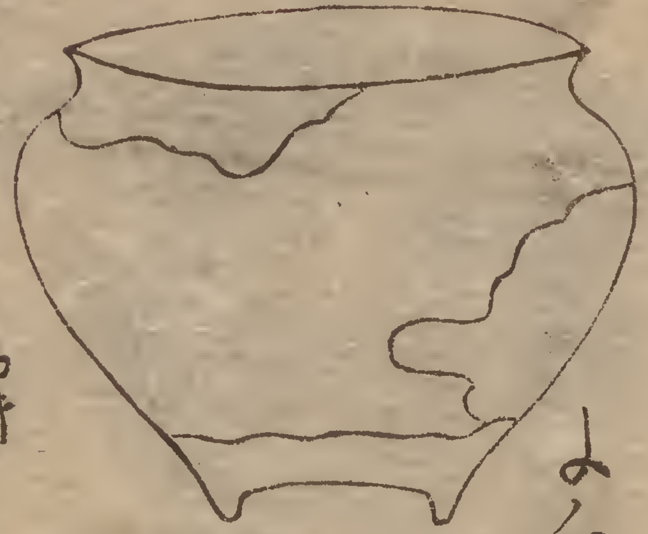
金銀の覆りんをかける也

一けんさんの下茶碗の内に銀梨地入交る上茶ハ黒き茶
の縁はふちがたまりハ黒くよき茶をいるる也
一大ひの盞ハ右同じ下茶碗の中に黒きハ末あるなり

井戸茶碗

一井戸茶碗ハ毒を去といひ井戸ハ此絵とよるひらき井戸ハ九メより十一メまてを上口ひらきたる土白之
濃茶ノ古内よ白猪口ニ
三ホゲ井戸
一タミ目
下茶
ヒラキ井戸

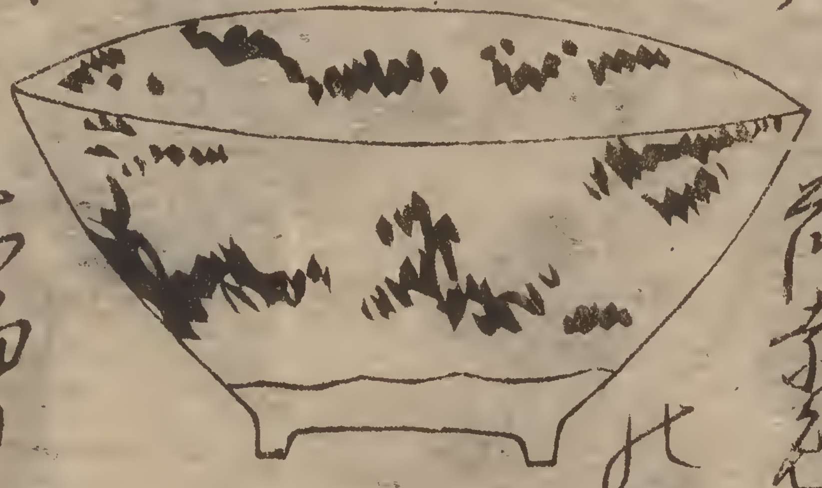




一古かけ
井戸ハ古唐茶色下茶柿かわらきに
古き肌に緋色此かはらけに高麗にも口内ニ目口
口を起して井戸よハ十二色此等之形

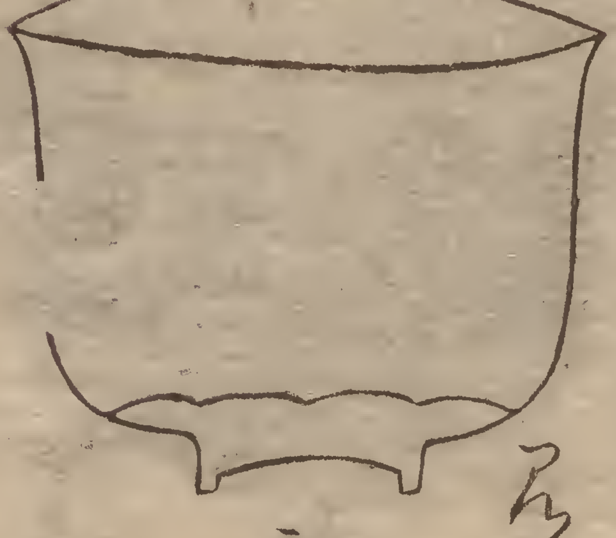
うや茶碗　こもがい茶碗

一うや八遠州公別して貴う此にる茶碗之古ハ古点色
あるま茶八唐茶色此艶和かなる茶之古内かり
此高麗貢
此茶入之
折く内よ
同なり又
十二三程ある



うや

一こもかい八古白し茶も白しこまかなるうち入
又艶能古き八こうかなる茶れ加えり
八多重之うや八上手物なく



こもかい

一 大徳寺紅葉手茶碗　古唐手茶碗

此茶碗は茶碗のごとくかうたいにはけめたかくる八持ち

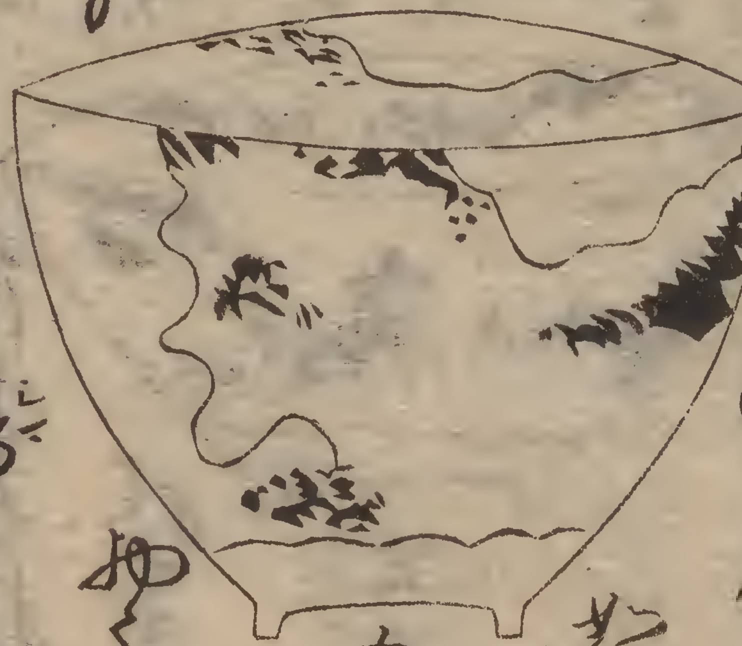
ふかく碗常は茶碗なりしかとも茶摘のごとく

緋色は 常文りたるを紅

葉手と

云て茶入

碗なる也



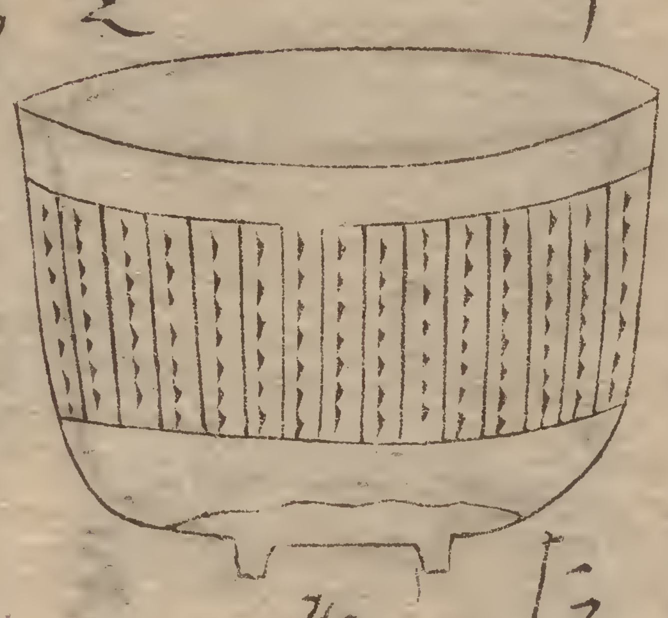
高麗手

地しろき釉之

一 このてのを云八三嶋と云 茶胴はすりよし白き茶碗のごとく

これはぐわん古きハ上代のものにてかやうなる事之大白

茶瓶茶く 茶碗手にも唐手のごとくも用る之



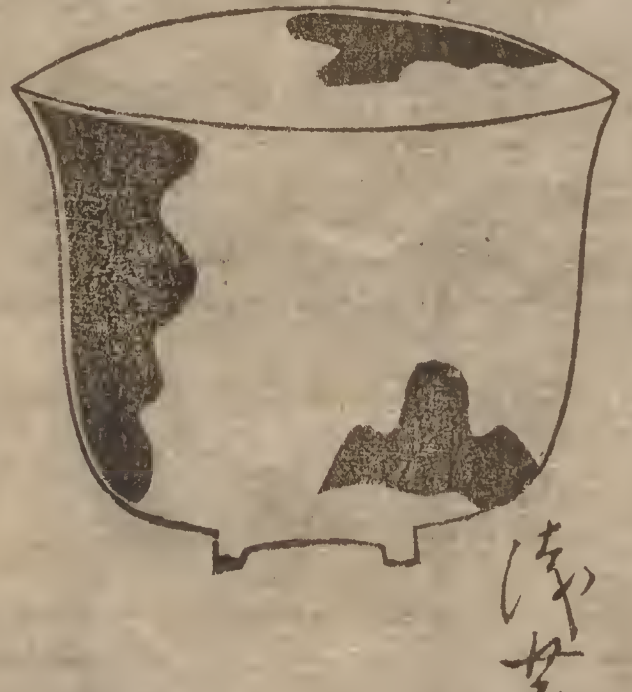
唐手

一 まんま茶碗　雲鶴手茶碗

一 まんま手茶碗 五器手なりと故茶湯によきとも云る故その言之

古稀にて茶艶を掲く古茶とも又かやうの柿なる

よ茶



茶 茶文

一 雲鶴手八古摘り手にし茶茶は艶碗がくさ茶

之雲鶴を切色さまより白き茶かくる之古さま新茶

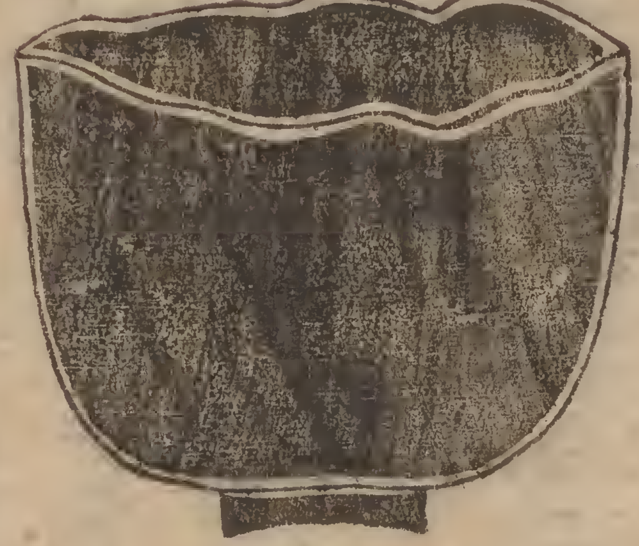
名古き八みな茶のごとく言違なる也之

金蘭手茶碗

一金蘭手ハ土白し薬白し其上ニ赤絵にて黄色ちらし緑色を書花此中ニ金を入たる也当代ニても出來如何ほどか

ハ高直なり

樂焼茶碗



一楽焼ハ利休時代ニ申一楽焼長次郎焼二代尼焼と云もの有是ハ中ニても古手の物也其外いろ〳〵有てや高価なるハ高直なり